
緋弾のアリア バレットダンサーズ

シェリーカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア バレットダンサーズ

【NZコード】

N1644V

【作者名】

シヨリーカ

【あらすじ】

特殊部隊TF141の隊員であると同時に、東京武偵高校の生徒でもある少年、矢崎影明。武偵として、TF141のメンバーとして、イ・ウーを追うことになる。特殊能力を持つ敵に能力を持たない彼はどう立ち向かうのか、緋弾のアリア バレットダンサーズ開幕！ 駄文ですがよろしくお願いします！

第0話 オンリーイージーテイ（前書き）

初めての方は初めまして、久しぶりの方はお久しぶりです。シェリーカです。諸事情により削除されてしまったIS Before Storyですが、新しく、緋弾のアリアを書くことにしました。改めてよろしくお願いします。では、第0話どうぞ！

第0話 オンリーイージーテイ

20XXX年 北海洋上 第11採油プラント

2日前、テロリストが洋上に浮かぶ石油プラントを制圧、中にいた作業員を人質に立て籠もつた。ただの立て籠もりなら英國武偵局の武偵でカタをつけられたのだが、プラントを制圧したグループは元軍人だつたため投入した武偵が逆に人質として捉えられてしまう。事態を重く見たイギリス政府は国連、米国政府に打診、イギリスSAS、アメリカ海兵隊、ネイビーシーALsなど、世界中から精銳が集められた特殊部隊「タスクフォース141（通称TF141）」を動員して事態の解決に乗り出した。

3月29日 採油プラント近海 4:02

海中を進む米国海軍のロサンゼルス級原子力潜水艦『シカゴ』。それのセイル後方にあるDDSにある部隊が搭乗していた。

ちなみに、ドライデッキ・シェルターとは、潜水艦が潜行状態において、ダイバーの容易な出入艦を可能にするエアロックと、小型潜水艇などの格納庫を組み合わせた潜水艦に着脱可能なモジュールで、今回ここにはSEAL輸送潜水艇（SDV）を格納している。

『USSシカゴ指揮官より水密格納庫へ、作戦開始だ』

「水密格納庫注水完了、減圧・・・・久しづりだからって緊張するなよジョーカー」

「大丈夫ですって、大尉」

「」のSDVに乗っているメンバーの中にひとりわ若いメンバーが居る、まだ、16か15くらいの少年だ。彼の名は矢崎景明このTF141の中では最年少のメンバーだ。

『チーム1、SDV発進』

潜水艦の艦長の声と共にハッチが開く、海中をSDVが静かに進んでいく。

「そりいやジョーカー、学校はいつからだ？」

「4月の・・・何時だつたつけ。忘れました」

彼とインカムで話しているのはTF141の隊員の1人ゲイリー・“ローチ”サンダーソン軍曹、にとつては兄のような人だ、中学2年の時にSASにオブザーバーとして参加していた父が亡くなつた後、SAS、TF141の隊員達は厳しく鍛えながらも景明を育てた。彼が東京武蔵校に入学してもよく連絡を取り合つてゐるし、こうして作戦に参加することもある。

「ローチ、ジョーカー、少し静かにしてろもつすぐ作戦開始だぞ」

通信中の2人に話しかけてきたのは、ソープ・マクダヴィッシュ大尉、ある大物武器商人の逮捕による功績で軍曹から大尉にまで昇進した人物でTF141の指揮官をしている。

「まあまあ、ローチだつて久しぶりで嬉しいんだろう、俺だつてこうして会うのは3ヶ月ぶりなんだぜ」

マクダヴィッシュ大尉の通信に入ってきたのは、口元を骸骨のバラクラバで覆いサングラスを掛けた男・・・ゴーストだ。意外と気さくな人でTF141のムードメーカーだつたりする。

「まあいい、もうすぐ作戦開始だ、切り替えろよ」

「「了解」」

暫くするとSDVは採油プラントの下に来た。ここでSDVから離れて海上にむかって泳ぐ。別の原子力潜水艦から出撃したチーム2も到着したらしい、ゴーストが『上へ』のジェスチャーをする。それにあわせてチーム1全員が泳ぎ始めた。景明の装備はACU迷彩のBDU『野戦服』にタクティカルベスト、リュックサックに軍用ロングブーツという装備で、その上から酸素ボンベとゴーグルを装備している。

海面に出るともう石油プラントの中だった、最下層には警備の兵が2人、楽しく談笑している。

「位置に着きました、合図を頼みます」

「ジョーカー、やれ

「了解」

そう言つと景明は警備の兵士の服を掴んで海中に引きずり込んだ。まさか海の中から来るとは想定外だつたのだろう。あっさりと倒すことができた、武僧なら基本的には犯罪者は殺さず、逮捕が基本だが今の景明はTF141の一員なので殺すことに躊躇いはしない。兵士が海底へと沈んでいく、チーム1のメンバーに引き上げられて石油プラントに上陸。ボンベとゴーグルを外して防水ケースに入れていた銃を取り出した。

今回景明が使うのはレミントンACR。このACRはもともとマグプル社が2007年に開発した、マグプルMASADAという銃が原型なのだが、MASADAは発表後もなく、AR15系クロームで有名なブッシュマスター社が、製造・販売権を買い取り、「ブッシュマスターACR」として販売される予定になった。しかし、その後ブッシュマスターと同資本下にあるレミントン社も供給元として名乗りを挙げ、前者は民間市場にセミオートオ nリーの製品を、後者は「レミントンACR」の名で、軍・法執行機関向けにフルオート射撃が可能な製品を供給することとなつて、そのうちの1つが彼の手にあるというわけだ。

ACRのレイルシステムにはホログラフィックサイトとフラッシュライト一体型フォアグリップ、減音器^{サブレッサー}、レーザーポインターを装備している、サイドアームはスイスの銃器メーカーSIG社が開発したハンドガン、シグザウエルSP2022をサイドホールスターに収納している。いつもは別の銃を使つてているのだが今回はこれにした。

「行くぞ、一瞬たりとも気を抜くな」

マクダヴィッシュ大尉と共に前進を開始する。

「いたぞ、手すりの向こうだ」

「自由に撃て、サプレッサーを忘れるな」

ジョーカーとゴーストが撃つ、それと同時にペットボトルから空気が抜けるような音がした、減音器・・・サイレンサー越しの銃声だ。哨兵が2人倒れた。

『付近に人質がいる、誤射に注意しろ』

潜水艦の司令官がそう伝えてきた。近くに扉がある、ここに人質

がいるらしい。 ドアに突入用のフレーム爆薬を仕掛け、 ドアが吹き飛ぶと同時に突入した。 1人・・・2人・・・3人・・・4人・・・ヘッドショットで4人を倒す。

「クリア」

「こっちもクリアだ」

ゴーストと大尉の方も終わつたらしい。

『人質はチーム2が救助する。 最上階まで捜索し、 残りの人質を救助しろ』

「了解」

「了解」

「了解だ・・・腕は鈍つてないなジョーカー」

そう言つてジョーカーとローチは上へと捜索に向かう。

『周囲を敵のヘリが警戒中だ、 見つかるなよ』

潜水艦の司令官がそう伝えてくる。

「了解、 見つかるなよ」

大尉がそう言つた数秒後、 ヘリが通り過ぎていつた。

『近くに人質がいるぞ、 注意しろ』

暫く行くと、詰め所のような建物があつた、どうやらあそこにも人質がいるらしい。

「行くぞ」

「了解」

ジョーカーが、フレーム爆薬でドアを吹き飛ばす。突入開始、同時に大尉も突入した。数秒で、5人倒すことに成功する。だが・・・

「敵の無線だ・・・お客様がおいでだぞ」

どうやら定時報告の前だつたらしい、今まで異常に気付いたようだ。

「プランBで行くぞ、死体にC4を仕掛ける」

大尉の指示に従つて、倒した敵にC4を仕掛ける。人質は既にチーム2に引き渡した後だ。

「高所にまわれ、死体をエサに奴らをおびき寄せる」

大尉、ゴーストと共に、3人は詰め所を出て、近くの梯子を登つた先の足場に伏せる。案の定、兵士がやってきた。数は10人程。「パトロールだ。接近するまで発砲するな」

「了解」

パトロールの兵士達が詰め所に入つたところでC4を起爆させる。詰め所から炎が盛大に吹き上がる。

「こちらホテル6、敵に見つかった」

『了解、情報によると人質は上部デッキの模様、爆発物反応あり、君らが目標を確保したらSAM（地対空ミサイル）破壊のため増援を送る。オーバー』

「了解、着陸地点“ラボー”から脱出する」

そう言って、足場から降りて行動再開。

「ジョーカー、中央軍の指示だ、海兵隊員を送り込めるよう上部デッキを制圧する、行くぞ！」

そう言って、大尉を先頭に上部デッキへと繋がる階段を目指して彼らは進んでいく。銃声に引き寄せられて、次々と敵兵がやってきた。たちまち銃撃戦の幕が開く、が、相手は軍人崩れのテロリスト。対するこつちは世界最強の特殊部隊、力の差は比べるまでもない。

「12時方向に目標！」

TF141のメンバーから入つた通信を頼りに敵の姿を探す、すぐ見つかった。銃撃開始、すぐに倒れるテロリスト、燃料タンクの陰に隠れて撃つてきている兵士に対しては、燃料タンクを爆発させて兵士を吹き飛ばす。おおむね戦闘は順調に進んでいたが・・・

「前方に攻撃ヘリだ、隠れろ！！」

「ゴーストがそう言つたと同時にヘリが現れた、旧式の攻撃ヘリだが、歩兵にとつては旧式でも十分脅威だ。側面に装備されたM134ミニーガンが火を噴く。採油プラントの壁に次々と弾痕が穿たれる。

「重火器で撃ち落とせ！」

大尉が叫ぶのと同時にジョーカーがミニーガンの攻撃をかいくぐつて敵が装備していたスティングガーミサイルを奪う、弾頭が入つているのを確認してから照準器を起こして、ヘリを狙つて発射。見事に命中した。炎を上げながら海へと落ちていく。

「敵ヘリ撃墜、いい腕だ」

「さすがだな。腕は鈍つてないらしい」

「ゴーストとTF141のメンバーであるスケアクロウが褒めてくれた。

「時間がない、上に出て残りの人質を確保する。海兵隊を呼ぶのはそれからだ」

大尉がそう言つて進んでいく。それに続くジョーカー達。いよいよ上部デッキに出た。敵の抵抗も激しくなつている。

「グレネード！」

先行していたTF141の隊員がそう告げる。それと同時にジョーカーとローチがグレネードを投げた。数秒後、グレネードが爆発、破片をもつて敵兵が次々と倒れていく。

「敵の側面に回りこめ！」

最後の人質がいると思われる部屋の前で、敵の指揮官らしき男が叫んでいるのが見えた。

「マクダヴィッショ大尉！ 指揮官はどうします！？」

「生け捕りにしろ！」

「了解！」

ジョーカーが遮蔽物から身を出して、ACRで指揮官の手足を的確に撃ち抜いた。周囲の敵兵は「ゴーストやローチがあらかた片付けたらしい。最後の人質がいると思われる部屋のドアにフレーム爆薬をセットしていた。指揮官に軍用の手錠をかけてからジョーカーと大尉もそつちに向かう、フレーム爆薬が爆発、ドアが吹き飛んでTF141の隊員が突入。ローチが2人、ゴーストも2人、ジョーカーも2人、計6人が瞬く間に倒された。

「クリア、最後の人質を確保！」

部屋の中には作業員の他にロンドン武偵局のバッジをつけた者もいた、どうやら彼らが先に突入してテロリストに捕まつた武偵らしい。

『 USS 指揮官了解、直ちに制空権確保のため海兵隊を送り込む。TF141は着陸地点、ラボーに移動されたし』

「了解」

そう言つて、TF141のメンバーは採油プラントにあるヘリポートへと向かう。同時に海兵隊のUH-60「ブラックホーク」がやってきた。キャビンから次々に海兵隊員が出てくる。

「ジヨーカー、さつきの人質を忘れるなよ」

「へーい」

先刻確保したテロリストの指揮官らしき男をブラックホークに乗せる、こうして、採油プラントの戦闘は終わった、今回の作戦でTF141は一人の死傷者を出すことなく任務を完遂、連度の高さを改めて知らしめることになった。

イギリス、ロンドン武偵局 9:42

その後、TF141の面々は無事にイギリスに帰ってきた、ここに来たのは捕まえた人質をロンドン武偵局に引き渡すためだ。スヌーツや、ブレザーを着た武偵達の中ではTF141は浮く、第一、軍人であるTF141と民間人である武偵では纏う雰囲気が違う。武偵は基本的に犯人を逮捕するのが基本方針だがTF141の場合は殺すことも少なくない。そこが彼らとの違いとも言える。

「相変わらず浮いてますね大尉」

「まあ、仕方ないといえば仕方ないな。引渡し場所はあそこか」

制圧作戦時に生け捕りにした指揮官をロンドン武偵局の武偵に引き渡す。ここでの武偵局の人間は何かにつけて自分達の成果にしたがる、この件も数週間して事件の報告書ができたときには採油プラントを制圧したのはTF141ではなくロンドン武偵局の成果にな

つている」とだらう。

「またこの成果も横取りされるんでしょうな・・・はあ」

「そう落ち込むなよジョーカー、いつものことだ」

ゴーストがそうこつて笑う。

「ま、やうですね」

「やうだぜ、気にしたってしようがない。今日ばかりする、作戦成功記念パーティーやるか?」

ローチが大尉に尋ねる。

「やうだな、とつあえず酒と食材買つて来るよつて指示するか

PDAを取り出してTF141のメンバーにそう伝える大尉。

「俺達はどうします?」

「ゴースト、お前にはローチとジョーカー連れて一緒にメシ買つて
いこ」

「了解・・・おーい、ジョーカー、買ひ出しへ行くぞー!」

大尉やローチが呼んでいたので、その後を追うジョーカーだった。

翌日の夕方、景明は日本に戻るためヒースロー空港に向かう。見送りに来たのはローチ、ゴースト他、数名のTF141の隊員達、数えるほどしかいない。大尉やそのほかの隊員達は全員一日酔いでグロッキー状態だ。今の彼はTF141のジョーカーではなく、東京武蔵高校の武蔵、矢崎景明だ。彼の基本的な服はダークスースに黒のロングコート。ローチ曰く高校生とは思えないほど似合っているらしい。

「それじゃあな、また連絡して来いよ」

「昔、東南アジアには行ったことがあるんだが・・・日本は初めてだな」

「アジアのほうで作戦することになつたら必ず日本に遊びに行くからな」

「はい、そのとおり歓迎しますよ」

「頼むぜジョーカー。それじゃ、元気でなー！」

「はい！」

ロビーから出国ゲートへ向かう景明に手を振るTF141の隊員達、周囲の人々はまさかこんな近くに世界最強の特殊部隊員たちがいるとは思わないだろう。それほど自然に溶け込んでいた。こうして、景明は日本へと帰っていく。

「さて、ついでにアロンソン・武偵局からきた情報だ。この前捕まえた指揮官はイ・ウーの兵士ということが判明。そいつの情報から次

のターゲットが決まった。これからTF141の最優先目標は『パトリフ』、『グラード』、『武僧殺し』、『デュランダル』の4つ、そろそろマクダヴィッシュも起きてるころだ。ジョーカーも日本で何かあつたら情報を送つてくれる、本部に戻るぞ、作戦開始！

「「「「了解！」」」

影明を見送った後、ゴーストが新たな目標を伝えた。それと同時に空港に来ていたTF141のメンバーの眼が兵士のそれへと色を変える、TF141の新たな戦いも始まるとしていた。

第0話 オンリーイージーテイ（後書き）

感想よろしくお願ひします！

主人公・矢崎景明【やさきかげあき】

16歳、身長175

黒の無造作ヘアが特徴的な少年だが、タスクフォース141の最年少隊員にして東京武偵高校2年生、所属科は強襲科武偵ランクはA。

強襲科アサルトだが、狙撃、運転、情報収集、医療、救助活動、など、TF141仕込みの多彩なスキルを持つ、現在使用しているのはレミントンACR、M92FS Ver tec、他にもM82A1バレットを持っているらしいが詳細は不明、近接戦闘では2本の大型軍用サバイバルナイフを使う。愛車はヤマハ・V-MAX（2代目）。1年のころからの友人であるキンジや武藤、不知火とよくつるんでいる。基本的に私服はスーツに黒の軍用防弾ロングコート、学校にいるときもコートは着ているらしい。所属クラスは2年A組。

設定 その1：タスクフォース141

2016年に起きた空港乱射事件に端を発する一連の事件の首謀者であるウラジミール・マカロフを捕まえるために創設された、イギリスSAS、アメリカ海兵隊、ネイビーシーSEALSなど、世界中から精銳が集められた特殊部隊「タスクフォース141（通称TF141）」だつたが、激戦の末にマカロフの逮捕に成功、その存在意義はなくなつたかに思えた、だが、世界で頻発する超能力者がらみの事件に対し部隊の存続が決定。目的をイ・ウーの殲滅、または逮捕という目的に変えて、日夜イ・ウーの動向を追つている。現

在の指揮官はイギリス S A S のソープ・マクダヴィッシュ大尉。

登場人物紹介&設定（後書き）

感想待つております。それでは！

第1話 いつもの日常（前書き）

本編開始！

第1話 いつもの日常

あかり side

新学期が始まってから一週間、のある日の午後の1年A組の授業は射撃演習だつた。間宮あかりにとつて射撃演習はあまり得意ではない分野だつた、とにかく的に当たらない。担当は強襲科《アサルト》の実習を受け持つ蘭豹なので、さぼつたら地獄のフルコースが待つてゐる、内容は想像するだけでおそりしい。

「じゃあ、まずは的に向かつて撃つてもらひうが、その前に手本を見せてやる。矢崎ー！」

「へーい」

そんなやる氣のない返事と共に現れたのは武慎高の防弾制服の上に真っ黒な軍用ロングコートを羽織つた無造作ヘア・・・というより本当に手を加えていない髪の男子生徒が現れた。

「じゃあ、今からこいつにお前らの武器の実演指導をする」

いま、参加している1年A組の強襲科^{アサルト}は全員がM4A1を持つてゐる、アメリカ軍の主力小銃でもあり、オプションパーツが豊富で扱いやすいM4は武慎高でも使つてゐる生徒が多い。

「うつそ・・・矢崎先輩だ・・・」

「かつこいい・・・！」

参加している女子達が小さな声でわざわざあつてゐる。あかりは

同じ強襲科で友人の火野ライカに尋ねることにした。

「ライカ、矢崎先輩つてだれ？」

「あかり、お前そんなことも知らないのかよ、アリア先輩や不知火先輩に次いで強襲科じゃ有名な先輩だぞ？」

「どんな人なの？」

「ランクこそAだけど、射撃、ナイフ格闘、狙撃、運転、情報収集、救助活動とか、他にも色々こなせる先輩なんだよ、噂じゃTF141の最年少隊員だつて話だぜ」

「ていーえふ141？」

「世界中から腕利きの特殊部隊隊員を集めた最強の特殊部隊のことだよつ・・と、始まるぞ」

ライカが話を中断して前を見ると蘭豹が説明している最中だった。

「言わせてもらうが、お前らは素人だ、立つたまま撃つても当たらなのは当たり前だ。そんな姿勢で撃つても当たらないし、間抜けにしか見えない、矢崎、見本を見せてやれ」

蘭豹がそう言つて景明に撃つように指示する。彼が持つているのも自分たちが使つているのと同じM4だつた。景明が的に背を向けて立つ。

(何するんだろ？・・・？)

そして、影明が目にもとまらない早さで的の方に振り向いて腰だめで撃つた。関係のないところに、弾丸が命中する。

「見たか？弾をばらまいただけ、当たりはしない」

蘭豹がそう言つ。あかりは純粹に感動していた、憧れであるアリア先輩や、大抵の女子達が憧れている不知火先輩もすごいが、この先輩も純粹にすごいと思った。後輩に見本を見せるためにわざとヘタな撃ち方をしたのだ。

「ターゲットを狙うには、安定した姿勢から慎重にサイトをのぞけばいい。照準後近くに標的がいるときはサイトを使うと素早く標的に狙いが定まる。矢崎、後輩にAランクの腕前を見せてやれ」

蘭豹が再び指示すると、景明がM4に装備されているサイトを使つて的を次々と撃つていく、細かいリズムで連射を区切る指きりバースト射撃だ。

「たったこれだけのことだ、ターゲットを倒したいか？ならサイトで狙つて撃つことだ。それじゃ、10分間各自、自由に撃つてみろ」

こうして、授業は進んでいく、あかりはマイクロUZI以外の銃で、久しぶりにターゲットに命中させることができた。

ライカ side

10分間の射撃演習が終わると、蘭豹は参加している生徒と景明を連れてグラウンドを掘つて作ったピットへと向かった、ここでは、走りながら銃を撃つ訓練を行つてゐる他、瞬時に犯罪者と民間人を区別して射撃するための訓練も兼ねている。ピットの周囲には足場

があり、そこから訓練を眺めることができた。アサルト強襲科の生徒が訓練していたが蘭豹が無理矢理追い出していた、相変わらず強引な教師だな、とライカは思う。

「じゃあ、見本を見せるから、矢崎、行け」

「了解」

そう言つて、ピットにこはいる、蘭豹がホイッスルを鳴らすと同時に先輩が走り出した、ターゲットが次々と出でてくる、銃を持ってい るターゲットと、銃を持っていないターゲットの一いつで、瞬時に判別するのは難しいが・・・

（すっげえ・・・一発も誤射してない・・・とにかく素早く、ミス無くやれってプログラムされた、走る銃座みてえだ・・・）

ライカが見ている内に景明は2階へと登る、犯罪者と民間人を見分けて2階から1階へ飛び降りる、銃撃とランニングを同時に て、ゴールへとたどり着く。

「ほい、タイムは・・・35秒、また上がったな」

「ありがとう」わざと、先生

そう言つて地上へ上がつてくる景明。

「それじゃ、各自残りの時間使ってやつとけ、矢崎、タイマー頼む わ

「先生はどちらへ？」

「だるくなつた、ちょっと職員室に戻る」

そう言つて、職員室へと帰つていく蘭豹、相変わらず勝手な教師だとおもいつつライカはM4を持つて、スタートラインに立つ、ライカの成績はターゲットには全弾命中、民間人への誤射が3回、コレでもクラスの中では少ない方だ、ゴールから地上に戻つてくると、影明がスマートフォン^{ロジ}を取り出して通信している。そのとき、グラウンドを車輌科と強襲科^{アサルト}のハンヴィーが走つてくるのが見えた、何かあつたらしい。

「おい、景明！乗つてくれ！」

「どうした、何が起きた？」

慌てている強襲科の2年生と冷静な影明のやりとりが聞こえてくる。

「奴ら仮設橋を吹つ飛ばした！出撃だ！」

ここ最近都内を騒がせている過激派の宗教団体が近くで建設している橋を吹き飛ばしたらしい。依頼にも、この橋の護衛に関する物が出ていたのをライカは思い出す。

「武藤を呼んで、車輌科^{ロジ}にある中古の架橋戦車を持って来させてくれ、そもそもこの件には別の強襲科^{アサルト}の連中が行つてたはずだろ？」

景明がそう言つと、ハンヴィーの無線を担当している生徒^{インフォルマ}おさりく情報科の生徒が答えた。

「先行して警備してた連中と強襲科の第1派が対岸のレッドゾーンで足止めを食らってる！連絡も途絶えた！」

「それはまずいな・・・判った、俺は装備を整えてから武藤と衛生科、狙撃科のメンバーと一緒に現場に向かう、先に現場に向かってくれ」

てきぱきと指示を出していく景明。ハンヴィーが校門から出て行くのを見送るとライカ達の方を振り向いて申し訳なさそうに言った。
「悪いな1年生、授業はここまでだ。各自教室に戻ってくれ、以上！」

そう言うと同時に景明は走り出した、おそらく装備科に装備を取りに行くんだろうとライカは推測した、走っていく背中を見ながら、彼女は思つ。

（アタシも・・・いつかあんな武道になつてみせる・・・）

ライカは周囲を気にして、声には出さず、その燃えるような思いを静かに胸の中で思つた。

第1話 いつもの日常（後書き）

AAのキャラ上手く書けているかどうか心配です。さて次回は本格的な戦闘シーン、本来なら、銀行強盗レベルで済ませる予定だったのですが・・・どうしてこうなったんだろう、本格的な戦争のにおいがする・・・、ということで次回も楽しみにしておいてください。感想お待ちしております。それでは――！

第2話 いつもの戦場

武慎高 アサルト
強襲科 14 : 26

景明がタクティカルベストを装備して、強襲科の装備が置かれている部屋に向かう、強襲科には銃を使う生徒一人一人に専用のガンロッカーが与えられる。その中から取り出したのはレミントンACR。口径は5.56mm。専用のガンケースに入れてから、サイドアームであるM92FS Ver tecをホルスターに収納する。M92にはレーザーpointerを装着済みだ。そこから装備科に立ち寄つてACR用のマガジンとM92用のマガジンを受け取る。マガジンはすべてベストのポーチに入れて、右耳に武慎高で作戦のときについインカムを装備したら準備完了だ。

「武藤！架橋戦車の準備は出来てるか？！」

『 いいでもいいぜ！』

「頼むぞ、俺ももうすぐそっちに合流する、おいでいくなよ？」

そういうて装備科からグラウンドに出る、すでにグラウンドには狙击科と強襲科の生徒が装備を整えて車両科のハンヴィーに乗り込んでいるところだった。ハンヴィーにはM2重機関銃と、増加装甲が取り付けられている。

「ここがイラクに思えるな・・・」

そういうて、景明はハンヴィーの一台に乗り込んだ。さあ、今日も仕事が始まる。

現場である橋に着いたとき、そこは花火大会の真っ最中だった、銃弾が飛び交いあちこちで爆発が起こる危険な花火大会。

「状況はどうなってる?」

景明がインカムに訪ねると、NHKアナウンサーのような声が耳に届いた、通信科の中空知だ。

『状況は現在こっちが不利です。対岸に渡るための仮設橋が爆弾によつて崩落、対岸への移動が困難になつています、相手の戦力は民兵が50人ほど、AK-47や RPG-7などで武装していると思われます』

「了解、状況が更新されたらまた伝えてくれ」

そういうつて景明は武偵高の生徒が撃ち合いをしている河川敷へと降りる。対岸から撃つてくるのは、就職難で就職できなかつたエリート学生や、主婦、老人など、現代社会から見捨てられたような存在の人々ばかりだ。そうなつたら最後は宗教にすがるしかないのだろう。ガンケースからACRを取り出す、マガジンは装着済み、コッキングレバーを引いて初弾装填。

(もつとも、こうこうとした時点で同情も手加減もする余地なんてないけどな)

そう思つて、工事用のクレーンを遮蔽物として使つてゐる、強襲科の生徒のところへ行く。

「状況は?」

「連中、また兵士が増えてる、RPGが飛んでくるからまともに反撃できない！」

「わかつた、今から援護する」

援護を求める強襲科の生徒と共に対岸へ向けて撃ち始める。それと同時に作戦に参加している生徒達に通信を繋いだ。

「全員聞いてるな！もうすぐ車輌科の架橋戦車が到着する。強襲科と狙撃科の増援もだ、あんな民兵風情に遅れをとるな！！」

インカムから作戦に参加している生徒の了解の声が聞こえる。そこへようやく武藤の運転する架橋戦車がやってきた。強襲科と狙撃科の増援をつれて。

「いけ！強襲科が道を拓く！！」

大分調子が戻ってきたらしい、強襲科の生徒が射撃を再開した。

「全員、対岸のRPGチームにフレッシャーをかけろ！架橋戦車がやられたら全員で泳ぐことになるぞ、いいな！！」

景明が発破を掛ける、対戦車兵器としてはもつともメジャーなRPGを武藤の乗っている架橋戦車に直撃したらただではすまない。相手はこっちを殺す気で襲つてきているが、こっちには武偵憲章9条があるために殺すことはできない、面倒なものだ、第一に条件がフェアではない。相手が得をするようなルールだ。

（もつとも、犯罪者の人権を重視してゐるフシがあるからなこんなこ

とになるんだろうな・・・迷わず殺せばいいものを・・・

日本は犯罪者的人権を重視して、できる限り穩便な方法ですまそ
うとする、警察が立て籠もり犯に向けて説得を行つてはいるのがいい
例だ、だがそれで警察に被害者が出ているのでは話にならない、メ
ディアも犯人が死亡するところぞつて警察の手際の悪さを批判する。
犯罪者がみんな涙頂戴でおちると思ったら大間違いだ。そんな人
情話はTVの中だけの話。

（あー、ダメだ、仕事に集中しないと・・・）

ダークな思考の中にとらわれ掛けた頭を元に戻す。敵の数は大分
減つてきてはいるが依然攻撃は続いたまま、武偵高の負傷者は後退
させて衛生科メディカに診てもらつてはいる。

『おい、まずいぞ。軽戦闘車輛テクニカルだ！』

架橋作業に入ろうとしていた武藤がそう叫んでいるのが聞こえた、
軽トラックの荷台に軽機関銃をつけた簡易な戦闘車輛。

「させるか！」

橋の上にもどりつつACRを撃つて次々と行動不能にしていく。
テクニカルのタイヤを撃つて行動不能にさせる。乗っていた学生ら
しき青年に銃弾を叩き込む。威力の弱い弱装弾なので、死ぬことは
ない。

「グレネードランチャー装備してた奴は対岸に向けて撃ちまくれ！」

数人がグレネードランチャー発射器をもつていたようで、
装備科アームド

が作った催涙ガス弾や催眠ガス弾が次々と対岸に飛んでいく。

「影明！ もうすぐ、神崎と狙撃科^{スナイプ}がそつちに到着するぞ！」

「了解！」

参加している情報科^{インフォーム}の生徒がそう伝えてきた。イギリス武偵高からやつてきたランク武偵、神崎・H・アリア、彼女の参加は大きい、今のうちに次の段階への準備を進める。

「もうすぐここに神崎が到着する！ 拳銃格闘^{アル・カタ}が得意な奴は架橋と同時に前に出でもらひからな！ 今のうちに集まってくれ！」

テクニカルを排除と同時に武藤の架橋戦車が橋をかけ始めた、と、そこへ、神崎や、狙撃科^{スナイプ}の生徒を乗せた武偵高のヘリがやってくる。

「どうなってるのー？」

「今さつき橋が完成したところだ、来てもらつてすぐで悪いんだが、突入部隊に加わって欲しい、構わないか？」

「ええ、いいわよ。でも突入はアタシだけです。文句は認めないわよ！」

神崎が単独先行するのはいつものことなので、拳銃格闘^{アル・カタ}使いの生徒は第2便として待機させておく。

「突入部隊以外の全生徒は援護射撃で相手に頭を上げさせるな、3カウントだ、行くぞ、3！」

1を言い終わる前に全員が援護射撃を開始、神崎が対岸へと突撃を開始する。上空からは狙撃科^{（スナイプ）}の生徒も射撃をし始めた。銃だけを狙つた精密射撃だ。

「せめて、最後までカウントしてから撃ちやがれ！！」

インカムにそろそろこんでから景明も撃ち始める。神崎の後に続いて、強襲科^{（アサルト）}の生徒が対岸へと渡る。景明達の援護射撃が効いているのか、相手は頭を上げてこない、狙撃科^{（スナイプ）}によつて銃を破壊され、対岸にわたつた強襲科^{（アサルト）}の生徒達の活躍もあり犯罪者達は順調に捕まりつつあつた。

「ま、こんなところか」

こうして、この大規模な銃撃戦は、幕を閉じた。

東京都お台場近郊港湾地区 16・58

周囲が、オレンジと青の空へと色を変えていく、この時間は夕方と夜の境目のような時間帯だ。武偵高と過激派宗教グループとの銃撃戦が終了してから現場では鑑識科^{（スルア）}の現場検証が行われていた。第2派を警戒してか、強襲科^{（アサルト）}の生徒が護衛している、景明も護衛に加わっていた。

「武藤、架橋戦車はどうだつた？」

「中々楽しかつたぜ、戦争映画みたいで、えつとな・・・」

笑顔で架橋戦車について語る武藤の話を一通り聞いているとスマ

一トフォンがなつた、電話してきたのは強襲科アサルトが誇るイケメン、不知火亮だつた。

「不知火か、何か判つたか？」

『さつきの犯人達を尋問科ダギュラ』が尋問してゐるけど、みんな当時の記憶を無くしてゐるんだつて』

「・・・判つた、また何かあつたら連絡してくれ」

そう言つてスマートフォンを『一ト』のポケットに仕舞つ。

「なんかあつたのか？」

「不知火からで、さつきの連中、軒並み記憶喪失だとさ、面倒なこ
つた」

「お前んとこも大変だな・・・同情するぜ」

武藤の架橋戦車を専用の運搬トレーラーに載せると、武藤が帰つて行つた。鑑識科の現場検証も大分終わつたらしい。撤収準備が進んでゐる。

「さて、俺も帰るとするか・・・ん？」

再びスマートフォンが鳴つた。差出人は不明、だが、メールには、依頼と時間と場所の指定がされてゐた。その依頼とは・・・自分のパートナーとなつて、ある依頼を一緒にしてもらいたいということだつた。場所は、晴海埠頭公園に夜の9時。

「・・・今日は、長い一日にならうだ・・・」

もう少くともACRの入ったケースを提げて、景明は歩き始めた。

第2話 いつもの戦場（後書き）

次回、ヒロイン登場！感想お持ちしております！それではーー！

第3話 むねの匂の綺麗な夜のJと（前編）

マイハロイノ森場一

第3話 ある月の綺麗な夜のこと

東京都 台場区 晴海埠頭公園 19:24

目的地である晴海埠頭公園についたときにはすでに夜の帳が下りていた。街灯がぼんやりと公園を照らしている。

「はじめまして、こうして話すのは初めてだね」

不意に、後ろから少女が現れた。武偵高の防弾制服に、スパッツ、編み上げブーツ、白い防弾ロングコートを羽織った少女で、栗色の髪をツインテールにして赤いフレームの眼鏡をかけている。

「名前は？見たところ同級生ってのはわかるんだが・・・」

「そうだね、私は服部つかさ、矢崎君と同じ2年A組だよ

そういうて微笑むつかさ。

「依頼の内容は歩きながら話すね。行こ」

そういうて2人は歩き出す。

「今日の依頼はね・・・」

彼女の口から依頼内容が語られた。内容はこうだ、1年前、神奈川県浦賀沖で、豪華客船『アンベリール号』が沈んだ。乗客に被害者はいなかつたものの、乗り合わせていた武偵1人が行方不明となつた事件だ。そして乗客からの訴訟を恐れたクルージング会社とそ

れにあおられた一部の乗客が、乗り合っていた武偵の無能を糾弾し始めた。そしてそれに便乗する形でマスクミも報道を開始、連日、乗り合させていた武偵の遺族を叩いたという事件だ。現在となつては覚えている者も少なく、この事件を知つてているのは一部の武偵とその遺族のみだといつ。

だがこれは表の話、実はこの話には知られざる一面があつた。

この激しい報道合戦が一段楽した直後から、訴訟を起こした乗客や過激な報道をしていた週刊誌や新聞の記者、ニュースで武偵に対して否定的な意見を言ったニュースキャスターや識者達が次々と死体となつて発見された。場合によつては一家丸ごと死体となつて発見されたケースも存在するといつ。一見関連性がなかつたため、メディアも大して報道しなかつたため大事にはなつていない。そして、その件を調べていた記者も、数日後、喉仏にナイフが突き刺さつた凄惨な死体で発見された。

「で、今夜は最後の仕上げ、当時クルージング会社を経営してた社長の家を襲うんだ。でも、数日前から社長の家に何人かPMC『民間軍事会社』の連中がいて私じや手に負えないといつて思つたの。だから矢崎くんを呼んだんだよ」

「なるほど、殺し『スイーパー』か

「どうするっやらないといつていうなら無理強いはしないけど・・・

「いや、武偵は金をもらつて何でもやる何でも屋・・・傭兵と大して変わらないからな・・・いいぜ、武偵の本当の怖さつてのを教えてやる」

そういうて凶悪な笑顔を浮かべる影明。

「いいよ、矢崎君・・・なんか滾つてきちゃう・・・食べちゃいたいなあ・・・」

影明に聞かれないように言つて、腰のホルスターから銃を取り出すつかさ、彼女が今回使うのは、SIGザウエルP226、高性能なことで有名なスイス製のハンドガンだ。

「周囲のPMCは俺が始末する。殺していいんだな？」

「うん、好きなようにやつちやつて！」

そう言つて、目的地である、クルージング会社の社長が住む家にたどり着いた。

「敵の戦力はどのくらいだ？」

「事前の報告では7人だつて」

「判つた、先にPMCから片づけていくから、バックアップは任せたぞ」

「りょーかい」

そう言つと、ACRを構えて屋敷の中へと潜入する景明、数人のPMCの社員が警備している最中だつた、ACRのセレクターーレバーをセミオート（单発）に変更して、相手の頭に銃弾を撃ち込む、倒れたときの音を聞かれるとマズイので、体を抱きかかえて、静か

に倒す。つかさにハンドシグナルを送る。

『見張りは始末した』

『判つた、鍵を開けるから、そつちで待つて』

暫くすると、つかさがやってきた。玄関に回つてピッキングでもするのかと思いきや・・・いきなりフレーム爆薬をセット、ドアを盛大に吹き飛ばした。

「大丈夫なのか？」

「電波妨害^{ジャミング}は一応してあるし、この家は結構離れてるから大丈夫だと思つただけだな・・・？」

「・・・ま、いいか。今ので起きたらうな、ここからは予定通りだ、俺はここにいるPMCの連中を始末してから合流する、行け！」

「頑張つてね！応援しちゃうよーー！」

そう言つて、先に家中へ、突入していくつかさ。別の部屋から完全武装の男達4人が血相を変えて出てきたが・・・。

「そこはもつと冷静に行動しろよ・・・にわか傭兵どもが」

戦場で一番大切なのは、銃の腕でも、特技でもない、いかに冷静に行動するかが大切だ、その点でこの傭兵達はダメだつた。突然の襲撃に対して状況確認もせずに出てきたからだ、冷静にACRで始末している最中に、別の方からナイフが飛んできた。咄嗟にACRでガードする、ナイフは・・・ACRの機関部に深々と突き刺さ

つた、もう「」の銃は使えない。M92FSを取り出す。

「はあああっー！」

「氣配も消さずに後ろからナイフを持った男が飛びかかってくる。
わざと、ACRにナイフを命中させたのもこいつらしいが・・・

「せめて氣配を消してから襲いかかれ」

冷静に相手の顔面に裏拳を叩き込む。感触からすると鼻の骨をへ
し折つたらしい。

「ひひ・・・・・・」

顔を押さえて、うめく男に近づく、手足に1発づつ叩き込んで動
けなくしておぐ。武健はあまり犯人を痛めつけるようなことはしな
いのだが、今は別に気にしない。

「」「」

「や、そりだつーせ、せめて命だけは助けてくれよっーー！」

「悪いが俺は妥協しない主義でな。命乞いは聞かない。じゃあな

銃声と共に男が血の海に倒れた。つかさは2階に行つたらしい、
上で暴れる音がしてくる、2階に上がってつかさと会流する。

「あ、矢崎くん！終わったの？」

「ああ、きれいでぱりだ。みんな寝てるよ・・・」「こいつらが

2人の視線の先には寝間着姿の男女がいた。共に50歳くらいだ
る。銃を見て恐ろしく震えている。

「……こんなことをして……ただでむと思つてゐるのか……」

「そ、そりやけ警察に連絡してやるんだから……」

2人は何故自分たちが殺されるハメになつたのか判つていらないら
しい。

「ねえ、2人とも、あんたらは、私たち武僧の恨みを買つたの、覚
えてるよね~1年前の事故のこと~」

「あ、あれは会社を守るために仕方なかつたんだ! 武装を許されて
いるからって調子に乗りやがつて……社会のクズどもめ……」

「そ、うよ! 銃なんて野蛮きわまりないわ! そんなのだから犯罪は減
らぬのよ! 犯罪を減らすには、まずお互い対話の場所を持つて……

・

銃声、妻の眉間に坑が開いていた。

「聞きたくもねえもんをべラべら喋りやがつて、てめえはTV伝道
師か」

景明が吐き捨てるように叫ぶ。

「なんてことをするんだ! 私の妻が……ああ……」

そう言つて社長が隠していた銀色のリボルバーを取り出して撃つたが・・・その前に景明とつかさ2人の銃から放たれた弾丸が社長を撃ち抜いた。盛大に血をふきながら地面に倒れる社長。だが最後にはなつた弾丸が景明の顔をかすつた。

「矢崎君！大丈夫なの！？」

がくがくと音を立てながら景明を揺らすつかさ。

「ん・・・大丈夫だから、そんなに揺らすな・・・」

そう言つて景明が立ち上がる。

「ふう・・・よかつたあ・・・」

「で、どうするんだ、こいつら」

そう言つて景明が2人の死体を指さす。

「あ、それはもう大丈夫だよ」

つかさが「一トのポケットから何かのスイッチを取り出す。

「はい！外で押してね！？」

「はい、といわれてもな・・・」

そう言いつつも家の外に出る2人。出るときに自分たちが来たという痕跡を消すのも忘れない。

「そもそも、この依頼のクライアントは誰だ？」

「なんか、公安の方からだつて」

「公安ね・・・調べない方がいいか。こつちが消されそうだ。で、これは何のスイッチなんだ？」

この国の公安が本気を出したら人間の1人や2人、簡単に存在を『無かつたこと』にするだろう。触らぬ神に祟りなし、だ。

「押してみたら判るよ！」

そう言われて、景明がスイッチを押すと・・・・・・2人がついさっきまでいた屋敷が盛大に炎を上げて吹き飛んだ。

「・・・ちょっと多すぎないか」

「これくらいでちょうどいいんじゃない？」

2人が罪の意識など欠片もないような会話をしていると遠くからパトカーや救急車のサイレンの音が聞こえてきた。路線バスに乗つて、学園島へと帰つて行く。

あの後検問にも引っかからず、無事に2人は帰つてくることができた。直線の道路に沿つて規則的に街灯が立つていて、中を2人が歩いていく、月光が2人の影を道路に映し出していた。

「今日は・・・ありがとね。助かったよ

「やうか、助けになつたのなら何よりだ」

さつきからつかさはすつといひだつた、屋敷から帰る途中、話を仕様にも互いに話が続かないのだ。戦闘中のハイテンションとは打つて変わっておとなしくなつてゐる。

「それじゃ、俺の男子寮はもうすぐなんでな。いいじへんで・・・つと、どうした?」

いきなり、つかさがコートの裾をつかんできた。

「えつと・・・その・・・矢崎くん、私の・・・パートナーになつてくれない・・・かな?」

上目遣いでお願いするつかさ。その眼には期待と不安の色が見える。

「わかつた、それじゃ、いれからよろしくな。」

「うん! ありがとう! 矢崎くん! 」

パートナーになつてくれたのが相当嬉しいらしい。

「それと・・・俺のことは、景明でいい

「じゃ、私は『つ・か・せ』でいいよ。これからよろしくね! 景明! 」

どうやらあが普段の彼女らしい、女子寮へむけて駆けだしていくつかさを見送つてから、景明も寮へと戻つていく。こうして、この月の綺麗な夜に新たな2人組が武健高に生まれた。

第3話 ねる仄の綺麗な夜の「J」と（後編）

感想お待ちしております。それではーー

第4話 武偵高の日常（前書き）

登場人物紹介2

服部つかさ 性別：女 身長：164 スリーサイズ：不明

影明のパートナーとなつた少女で、栗色のツインテールと赤いフレームの眼鏡がトレードマーク、場合によつては白い防弾ロングコートを着ていることもある、所属クラスは2年A組。

その名から判るように徳川家康に仕えた伊賀同心の支配役、服部半蔵の末裔だが、分家筋と言つこともあり、実家からそれほど縛られない、忍者としてのスキルは1年の諜報科の風魔ひなほど高くはない。その反面他の戦闘能力は一族の中では最強といわれているのだが、なぜか影明の前ではあまり見せないようにしている。猫のような性格だが、影明の前では素が出るらしい。（キャラのイメージとしてはエヴァ破のマリ）これといった使用武器はなく基本的に何でも使う。武偵ランクはA。

第4話 武偵高の日常

第3男子寮 景明の部屋 6：36

基本的に武偵高の寮は複数の生徒で共同生活を送るため、広い間取りなのだが景明は1人でこの部屋を使用している。が、今日は珍しいことにこの部屋に来客があった。

「……で、なにしてるんだ」

「朝ご飯たかりに来たの」

部屋のTVで朝の一コースを見ながらそんなことを平然と言つてのけるつかさ。

「こつも朝は毎日してるんだ?」

「ウイダーですませてる」

「……仕方ねえ、食べるか?」

そういうて、景明が持つてきたのはハンバーガーだった。

「これって、手作り?」

「ああ」

ハンバーガーを食べたつかさの動きが止まった。

「・・・口に呑わなかつたかな?」

「なんで・・・」

「?」

「なんでこんなに上手なんだろう・・・・・・・・シヨック・・・・。
でもおいしいね、これ、これから毎日たかりに来ても・・・・い
い?」

「好きにしろ」

そう言つて、TVのチャンネルをまわしていく、TVでやつてい
るのはいつもと変わらない、政治家の汚職や、アイドルの「ゴシップ、
今日は有名なイケメン俳優がアイドルとつきあつてることが発覚
したというニュースが大々的に取り上げられていた。

「こんなニュース見て、誰が喜ぶんだろう?」

「さあな、どこかの暇な人間だろ」

そう言つて再びチャンネルをまわす、国際的なニュースはやらな
いくせに、ゴミのような政治家や二流アイドルのスキャンダルはバ
力みたいに繰り返し放送している。

「国際的な問題に日本人は驚くほど興味が少ない、日本は平和だし、
戦争もしてないからな、遠い遠い海の彼方つて感覚なんだろう、だ
から、アフリカの方のドキュメンタリーを見て『かわいそう』とか
言って募金をするバカがこの国には多いんだろうな、何も知らない
からこんなことが言えるんだ、無知ってのは恐ろしいモンだね」

「・・・実際にこの田で見てきたような言い方だね、行つたことあるの？」

「ああ、昔行つたことがある、俺の経歴も一通り調べてあるんだろ？」

「うふ、表も、裏も知つてるよ」

「20XX年のアフリカ東部にある軍事独裁政権の幹部を誘拐したときにな、見たんだよ。世界各国から送られてきている募金はそのほとんどが政府の要人の道楽に使われたり兵器購入の資金になつてるって書類をな・・・うつすら予想してたとはいえ実際に見てみると相当なもんだったな」

「そのクールな性格はその時からなの？世の中を斜めに見てるつて奴？」

「・・・かもな、否定はできない・・・つと暗い話題になつたな・・・つてつかせ、何してるんだ？」

いつの間にかつかれた部屋の中におこしてあつた銃を手にとつて眺めていた。

「」MGにショットガンにアサルトライフル・・・あ、スナイパー・ライフルまである、ちょっとした武器庫みたい・・・

そう言つて物珍しげに眺めるつかさ。

「やういや、つかさは自分の銃持つてるのか？」

「ううん、中々いいのが見つからなくてね～困ってるの」

「それじゃあ・・・」の部屋にある奴で気に入った奴持つて行くか？」

「・・・いいの？」

キラキラと目を輝かせるつかさ。

「銃くらいはもつといった方がいいだろ」

さう景明が言ひとつかさはショッピングモールで服を選んでいくかのように銃を選び始めた、数分後、彼女が持つてきたのはHK416。HK416は、H&K社が開発したM4カービンの近代改良版で、口径は5.56mm。オプションパーツはC-MORE社製ドットサイト、サイレンサー、フラッシュマガジン、レーザーサイト、と標準的なパーツを装備してある。

「影明の銃は？」

「ん？この前新調してな、今は平賀のところでカスタム中、今日あたりでできるらしい」

「じゃ、そろそろ行こつか！」

自分の鞄を持って玄関へと駆けだしていくつかさ、景明もそれを追つて外に出る。

「あれ、影明つてバイクで通学してるんだ」

「どうする？乗つてくか？」

そう言ってヘルメットを投げてよこす景明。

「私の分？」

「予備だ」

「ふ～ん」

そう言って、影明のV-MAXのシートにまたがるつかさ、バイクが轟音と共に走り始める。

武慎高 2年A組 11:56

午前中の授業が終わった、クラスでは仲のいい物同士で机を寄せ合って弁当を食べている生徒が多いこと、辺は一般の高校に見えなくもない。

「お皿はー？」

つかさが影明の席にやつってきた。

「うん・・・あの服部さんが・・・」

「矢崎くんも大変だね・・・」

「今度は何日持つか賭けてみる？」

クラスのあかひから小声でささやかれている。それを聞いていたつかさの顔が少し曇った。

「行くぞ、ちょっとヒダチ誘つてからな・・・キンジー、武藤ーメシ食いに行こうぜー」

「おう！ 影明、まつてろよ！」

「わかった、すぐ行く！」

友人2人を昼飯に誘うと・・・もう1人ついてきた、ピンク色のツインテールこの学校では有名人だ。神崎・H・アリア。5人で食堂へと歩いていく。

「おいキンジ、一体どういうことだ？ Sランク武僧がお前と一緒にいるなんて、また何かやらかしたのか？」

「違ひ、こいつが勝手に付いてきてるだけだ、あらぬ誤解をするな。景明だつて、女子連れてるじゃねえか」

「・・・まあいいや、それと武藤、自分だけツレが居ないからつて泣くな」

後ろで若干泣きかけていた武藤に釘を刺しておぐ。適当な席に座つて、各自バラバラの昼食を取る、景明はラーメン、キンジはきつねうどん、武藤はパスタ、つかさはピザ、アリアはももまんという何ともバラエティ豊かなテーブルになった。

「まあいいや、神崎さんはなんでキンジと一緒にいるんだ？」

「それよりまずお前だら景明」

「私は、服部つかせ、みんなと同じA組だよ。」

「とこつわけだ、次、キンジ」

「・・・始業式に行く途中でチャリに爆弾が仕掛けられてな・・・」

「

「で、アタシがたすけてやつたの」「ドレ、感謝もしないの」

「よく言ひせり、勝手に俺の部屋にやつしきたくせに」

「言い争いを始めようとしたといひつかさが爆弾を投げ込んだ。」

「え? まさかおふたりさん、できひやつてゐるの?」

「「違つて!」」

「いつこいつといひはめ息が合ひひりつて」

昼食を済ませて、キンジ達と別れた2人は装備科にやつってきた。^{アムド}

「平賀ーいぬかー?」

「はーいなのだ!」

「一でせり何かのパートを髪にひつつけながら出でたのは平賀

源内の子孫、平賀文で、料金は高いが、武器のカスタムをしてくれる。景明自身も何度か頼んだことがある。

「はいよ、料金だ」

そう言って、万札10枚を文に渡す景明。

「これからもよろしく! なのだ。」

そういうて文が大小2つのケースを景明に渡す。

「いや、また用があつたら来る」

「毎度あり~なのだ!」

2人が強襲科のシユーティングレンジに入る。そこでよひやく影明はケースを開けた。

「さすがだな、ちゃんとカスタマイズされてる」

「これは・・・M4?」

「こいつはノベスキーニューチェンジ、M4系ライフルのアクセサリー・カスタムパーツ開発で知られる、ノベスキーリー社が製作・販売しているAR15系のクローラー銃だ。自社製のパーツと、人気の高い他社製パーツとを組み合わせたカスタムモデルだな」

N4には、レーザーサイト、フラッシュライト、フォアグリップの他にホログラフィックサイトを装備していた。小さな方のケースにはキンバーゴールドコンバット?、アメリカの銃器メーカーイン

バー社製のオーダーメイドしたハンドガンで、サイト以外の主用パーツがシルバーのカスタムパーツに追加変更されている。それがケースの中に2つ入っていた。

「これが、景明の本来の装備？」

「ああ、とりあえず、授業に行くか」

5時間目は強襲科^{アサルト}の授業なので体育館へと向かう。既に数人の生徒が訓練中だった。暫くすると授業開始のチャイムが鳴る。基本的に強襲科^{アサルト}の授業は一定のノルマをこなせば自由とされているが・・・今日は違った。

「よし、じゃあ、アリアと矢崎。2人で拳銃格闘戦の実習な」

蘭豹がとんでもないことを言い出した。授業に参加している生徒が一度訓練を中断して観戦にまわる。

「それじゃ、いくわよ」

アリアが黒と銀色のガバメントを抜いた、景明もコートを翻してゴールドコンバット？を両手に持つ、偶然だが2人とも使っているのはガバメント系列の銃だった。体育館が静まる。

「では、始め！！」

蘭豹の声が体育館に響いた。

戦・闘・開・始

第4話 武偵高の日常（後書き）

今回から景明の使うハンドガン、キンバー「ゴールドコンバット」は、有名な映画『エクスペンドブルズ』で主人公のシルベスター・スタローンが使っている銃です。気になった方は画像を探してみることをおすすめします。

感想をお待ちしております。それでは！！

アリアと影明が近接拳銃格闘を模擬戦する2日前 第1女子寮
20・56

女子寮の裏手で、アリアは1人の人物を待っていた、作業は、戦姉妹ミカである、間宮あかりに任せている。暫くすると諜報科の1年風魔ひながやつてきた。彼女には先日自分の戦姉妹ミカとなつた、あかりについて調べるよう依頼しておいたのだ。一通りあかりについての報告を聞き終わる。

「間宮あかりについては」ちらでも気になることがありますので

「そり・・・・・それと、あの2人については何か判つた？」

「服部殿と矢崎殿のことではござるな？」

キンジを見つける前に彼女のパートナーとしての候補は何人かあがつていた、その中で最後まで残つていたのがこの2人なのだ。

「服部殿についてはそれほど手間は掛からなかつたでござるよ」

「伊賀忍者のまとめ役、服部半蔵の子孫よね？」

「やつでござるが、彼女は分家筋の方なので、本家との繋がりは薄いでござるよ」

「わかつてゐ、アタシが聞きたいのは別のこと」

「服部殿は、忍者としてのスキルはさほど高くはないのでござるが・
・・・・それ以外の戦闘技術については一族最強とも言われるほ
どの強さでござる。ただ・・・服部殿はどこか自分の力をあまり見
せたがつていなこよくなのでござるよ」

そういうて、ひながアリアにつかさのデータをまとめた書類を渡
す。

「なんでかしら・・・まあいいわ、矢崎の方はどうなの？」

「矢崎殿については・・・正直骨が折れたでござる・・・

「そんな風には見えないんだけどね・・・どうだったの？」

「経歴がちゃんと追えたのは14歳まで、父親の死後、その友人に
SASで鍛えてもらっていたよくなのでござる、このときに数度の
実戦にも参加が確認されているでござるが・・・」

「どうしたのよ、あんたらしくもない」

「SASから先の経歴が追えないのですよ。イギリス軍、アメ
リカ軍からも追つてみたのでござるが、軍事機密の壁は高いでござ
つた」

「アイツ軍人だったのね・・・どうりで雰囲気が他のと違つと思つ
たわ・・・」

「それで、別の方向からせめてみたでござる」

そういうて、制服から数枚の写真を取り出すひな。

「神崎殿は、今年の3月に起きた北海の採油プラント制圧事件はござりでござるか？」

「ええ、知ってるわ。ロンドン武偵局の戦果つてことになつてることで、あの事件、本当は誰が解決したの？」

「その答えがこれでござる、プラント内部の監視カメラの映像を通信科で解析してもらつたところ・・・」

ひなが写真に映つている人物を指さす。

「これは・・・日本人よね」

「顔のパーツをスキャンして調べるシステムでこの人物を調べてみると、これは100%矢崎殿でござつた」

「なんで、こいつがこんなところにいるのよ」

「それはこれを見てくだされ」

別の写真を、アリアへと渡す。それはBDUに縫いつけられた部隊章の拡大写真だった。

「オリーブの葉っぱに剣と翼、骸骨・・・ってこれまさか！」

「神崎殿の推測通り、その部隊章はタスクフォース141のものでござる」

アリアですら驚きの声を上げるようなとんでもない物が出てきた。

有名人の子孫なら自分やキンジなどもそうなので、大して驚きはないのだが・・・眉唾ものだと思っていた特殊部隊が実在し、その中の1人が自分の近くにいるというのは想定外だった。

「まさか本当に実在したとはね・・・なるほど、ここにいるんだつたらアイツの戦闘能力があんなに高いのもうなずけるわね」^{TF₁₄1}

「神崎殿、この2人については如何いたすで」「ざるか？」

「この2人の調査も引き続き続けて、また報告頼むわね」

「承知」

そう言って、ひなが闇の中へと戻つていく。

（キンジ以外にも）こんな化け物が残つていたなんてね・・・）

アリアが月を見上げつつ静かに呟いた。そのつぶやきは誰にも聞かれることがなく闇の中へと消えていく・・・。

第4・5話 調査（後書き）

AAで、風魔がアリアにあかりについての調査の後、主人公とメインヒロインについての経歴を調べさせていたら・・・という思いつきで生まれた話です。感想お待ちしております。それでは！！

第5話 模擬戦

体育館 アサルト
強襲科の授業。 14 : 55

蘭豹の号令と共に模擬戦が始まった。

(まずは・・・先制攻撃！！)

先に動いたのは・・・アリアの方だった。両手のガバメントを交互に撃ちながらまっすぐ向かってくる。ガバメントも「ゴールドコンバット？」も装弾数は同じ8発だ、景明がそれを避けるが数発防弾口ングコートにもらってしまう。お返しといわんばかりにアリアに向かって撃つ。アリアがそれを避けながら景明の背後を取つたが、景明は両手だけをアリアの方に向けて「ゴールドコンバット？」を撃つ。射線上からはずれて一度アリアが距離を取つた。

(そう簡単にはやらせてもらえないわね・・・)

景明もマガジンチェンジ。今度は景明が前へ跳んだ、一気に距離を詰める。アリアがそれを右へ回避するとそれも想定済みだつたらしく、右手の「ゴールドコンバット？」がアリアに向けて撃たれる。

(Uランクの相手がここまでしんどいものとはな・・・)

1人で特殊部隊1個中隊の戦力を持つUランク武偵にはAランク武偵が束になつてもかなわない。越えられない壁があるので、この模擬戦も開始数秒で片が付くと思われていたが・・・。いつの間にか観戦していたクラスメイトは1人残らず集中して観戦していた。再び景明とアリアが互いに撃ち合う、アリアの防弾制服はまだ綺麗

なままだが、景明の制服や防弾ロングコートには大分直撃している。そして・・・2人の動きが止まつた。互いに相手を探つてゐる。景明は大分疲れてが見え始めてい多、どちらにせよ次の一手で勝負が決まる。

(今よ!)

ついにアリアが動いた、景明が撃ちにくいように直線軌道ではなく、ジグザグに移動しながらガバメントを撃つ、景明がその軌道を読んで撃とうとしたときアリアが宙返りをした。

(これなら反応できないはず!)

だが、景明が瞬時に反応、アリアに向けて「ゴールドコンバット?」を撃ちまくる、ついにアリアの防弾制服に弾丸が直撃した。再び背後を取つてガバメントを突きつけるが、景明も同じタイミングでアリアに「ゴールドコンバット?」を突きつけていた。

「そこまでにしろ!」

蘭豹がそう言つと体育館に張りつめていた緊張が解けた。

「矢崎、Uランク相手にあんだけ持ちこたえるなんてスゲえぞ!」

「よくやつた!」

体育館のあちこちで、観戦していた生徒から賞賛と歓声があがつた。

「じゃ、後は自由にしろ。以上!」

蘭豹がそう言つて体育館を出て行くと後はいつも通りの自主訓練が始まった。

「か～げあき～す、」いね、神崎さん相手に6分も持ちこたえるなんて！」

つかさがハイテンションで走ってきた。

「格の違ひって奴を思い知つたぜ・・・・・疲れた」

そう言いながらスポーツドリンクを飲む影明。

「で、どうする？」

「私はこれからHK416を慣らしに行くよ、景明は？」

「俺も、N4の慣らしでもするか」

そう言つて、影明が自分のケースを持って第1グラウンドにある射撃場へと向かつた。既に数人の強襲科アサルトや、狙撃科スナイプの生徒が訓練していた。

「わたし。HK416取つてくるね」

つかさが銃を取りに行くと、影明はN4 CQBをケースから取り出した。

「やあ、矢崎くん」

「不知火か、どうした？」

話しかけてきたのは友人の1人である不知火亮、^{アサルト}強襲科所属で、ランクはA。影明も何度か一緒に組んで任務をこなしたこともある。

「神崎さん相手に5分以上持ちこたえたAランクなんて、矢崎くんが初めてじゃないかな？」

「引き分けに持ち込めただけで僥倖だぜ……」

「そんなに謙遜することないって、それと最近服部さんと組んでるんだって？」

「人の口には立てられぬ……か、面倒だな……」

Ζ4にマガジンを差し込んで初弾装填、ターゲットに向けて撃つ。ターゲットの真ん中に命中。

「クラスの女子が話してたらいいんだけどどうしてあんなのと組んだんだろ？ってさ」

「下世話な好奇心つて奴か……ちょっと遅すぎないか？」

つかさがいつまで経っても戻つてこない、既につかさを見送つてから15分が経っていた。

「……確かにね、何があったのかな？」

Ζ4をケースにしまってつかさを捜すこととした、^{アサルト}強襲科の装備保管庫でつかさは見つかったのだが……

「・・・つかさ、どうしたんだ？」

「景明にもらつた銃・・・こんなになつちやつた・・・」

つかさが指さすとそこにはパーティ単位でバラバラになつたHK416が転がつていた。光学機器も中の配線がショートさせられている。再生できないレベルの壊し方だ。

「「めんね、影明。せっかく影明がくれたのに・・・」

つかさの目から涙がこぼれ落ちる。不知火が静かに装備保管庫を後にした、こういう時の気配りが彼のモテる一因なのだろう。

「大丈夫だから、泣くな」

静かにつかさの手を握る影明。相手が何も言いたくないときは、黙つて側にいてやることだ、とマクダヴィット・シユ大尉から教えてもらつたことがある。不意に人の気配がした、装備保管庫から外に出てみると、数人の女子の後ろ姿が見えた。

「・・・つかさ、場所を移動させるぞ。学校には早退したつて言っておく。これが俺の部屋のキーだから、先に行つて待つてろ」

景明が教務科マスターに報告しに行こうとしたときコートの裾が引っ張られた。前にも一度つかさに引っ張られたことがあつたが、今回は、前よりも弱々しかつた。

「・・・一緒に来て・・・」

眼鏡の奥の潤んだ目でさう言われると従わざるをえなくなつてしまつ。

「わかつた、行くぞ

2人がバイクに乗つて武尊高を後にした。

第5話 模擬戦（後書き）

次回、多分ですがフラグが立つと思います。それでは、感想待つております！

第6話 ジャッカス

つかさにバイクのところへ行くように指示してから、影明はもう一度装備保管庫を調べた。小型のハンドガン用ケースが開いたまま放置されている。中に入っていた銃は盗まれているようだった。

「やれやれ……どこかのバカだ……？」

そうぼやかすにはいられない影明だった。おそらくはつかさの才能に嫉妬した誰かが徒党を組んで持ち物……武健高では銃を隠したり壊したりしたのだろう。こいついうところも普通の高校生らしいといえばそうなのだが、ここには武健高なのだ、そんな暇なことをしている暇があるのであら生存率を上げるための努力をしたほうがいい。

（後日、マスター教務科に報告するか……）

そう決めると影明は自分のガンケースを持って、つかさのところへと向かう。早退することは不知火経由で蘭豹に伝えてもらつていい。いい友人を持ったものだ。

「つかさ、大丈夫か？」

涙のあとが残っているが、もう泣きやんだようだ。ヘルメットを渡してV-MAXで第3男子寮へと戻る、自分の部屋へつかさを連れて行く。

「…………」

部屋に入つてから、つかさは無言だった。そうなると部屋の空氣

も沈んだものになつていぐ。話しかけにいくから沈黙が続く、空気が沈む……悪循環なことこの上ない。

「…………」めんね、影明。わたし……皆から嫌われてるみたいなの……だから……」

「パートナーは解消……とでも言つつもりか？」

「…………うん。影明がしたいなら……それでもいいよ……」

「……それで、お前はどうしたい？」

「え……？」

顔を上げて、影明の方を見るつかさ。

「俺のことはどうでもいいから、つかさはめざむしたいんだ。解消するか、しないか、だ」

「……くない……解消したくない……」

「じゃあ、そうしる。周りの悪口なんぞ聞くな、評価も気にするな、大事なのは自分自身の意志つて奴だ……柄にもない」と言つたな

若干顔を背ける影明、つかさがにやけているのが判る。大分調子が戻ってきたようだ。

「あれ、影明、顔赤くなつてない？」

「これは夕日の加減つて奴だ。さて、これから俺流の『嫌なことがあつたときのストレス発散法』を教えてやる」

「影里ちゃん、ついでに、レーダーDVDをセイシ
タカ。

「つかさは英語出来るよな？」

「一応はでしゃる立地・・・どうして?」

「それは見てのお楽しみだ」

暫くすると番組が始まつた。内容は・・・・・・・『超』がつくほどアホなことを真剣に取り組んでいる番組だつた。

卷之三

卷之三

2人とも大爆笑していた、悩みを吹き飛ばす・・・というより、悩みなんか心底どうでもよくなつてくる。そんな番組だつた。暫く爆笑して番組が終わると、いつのまにか夜の帳が降りていた。

「なんて番組よ・・・ふふつ」

「ジャッカスつて番組だ、ああやつてアホな企画ばっかりしてる。でも・・・ストレス発散にはいいだろ？」

「うそ、誰なんかどうでもよくなつてゐねー。」

いつものつかさに戻っている、やつぱりこの相棒は元気でないと困る・・・と影明は思った。

「晩飯は・・・ピザでもいいか?」

「うん、いいけど・・・作ってくれないんだ」

「今日は食材を切らしててな・・・」

暫くするとピザが届いた、2人で5つずつ分ける。

「あれ? 影明、飲んでるの? ・・・オレンジジュース?」

「悪いが」

「なんでなの?」

「笑うなよ

「笑わないよ」

若干にやけているのは見なかつたことにする影明。

「炭酸が飲めないからだ」

「病気? アレルギー?」

つかさが心配そうに聞いてくる。

「単に苦手だからだ」

「……………」
「それだけ？」

「それだけ」

つかさが笑っている、笑わないと言つたはずなのだが……まあ、元気になつたし、笑顔も戻つてきているので、影明は食事に戻ることにした。

第3男子寮 20:22

夕食をすましてから暫くしていると雨雲が出てきたのでつかさが女子寮へ帰ることになつた。折りたたみ傘を渡して気をつけるように言つておく。

「それと、ハンドガンもやられてたんだが……この際新しい銃を渡しておぐ、2丁拳銃は出来るか？」

「うん」

「じゃあ、これを」

そう言つて影明が渡したのは、スイスの銃器メーカーSIG社が製造したガバメントとSIGザウエルP226を足して2で割ったようなデザインのハンドガン、SIG GSR。スライドはシルバーになつている。

「これ……いいの？」

「ああ、大事に使ってくれ、HK416の方はまた近いうちに渡す、
じゃあな」

「・・・影明、今日はありがとう。」

満面の笑顔でつかさが言うと影明は照れくさそうに笑った。つか
さが女子寮へ向けて駆けだしていく。

「さて・・・横田まで行つて帰つてこれるかな・・・」

つかさ side

初めて、彼を見たのは武慎高に入つてからだつた。どこか他人を
寄せ付けないような雰囲気の男だつ
たが、私はそんな彼をいつの間にか眼で追うようになつていた、暫
くすると、頭のどこかでいつも彼の
ことを考えるようになつていた。何かのイベントの時、こういうと
き、彼なら・・・と考えてしまつ。

そして、今年、裏の仕事が回つてきた、本来なら1人でも出来るは
ずの仕事だつたのだが・・・いつま
でも見ているだけでは始まらない、だから・・・彼と共同で仕事を
こなした。学校での嫌がらせの回数
はだんだん増えていつたが・・・あえて気にしないようにしていた。
そして、今日、いよいよ装備にまで手を掛ける彼女たちに心が折
られかけたが・・・それよ
りも彼に心配してもらえたことの方が嬉しかった。これからもパー
トナーを続けていけることが嬉しか
った。

「やつぱり……」これは恋……かな？ こいつなつちやつたのは君のせいなんだからね、影明」

私は写真立ての彼にそう言つた、本人と明日も話せるのに、私は恋に関して奥手なのだ……と自覚しつつ、私は夢の世界へと旅立つた。

side out

武慎高 7:59

今日は朝から雨だったので、朝練は中止。今はこうして教室で銃の整備をしている最中だ。つかさは……無事学校に来れている。嫌がらせグループの女子達が一力所に集まつて作戦会議しているのが目についた。そのうちの1人がこっちにやってくる。

「ねえ、矢崎くん。服部さんに何があつたの？」

リーダー格の女子が何食わぬ顔でそう尋ねてくる。だが……

「へえ、装備の次はパートナーに手を出すんだあ？」

つかさの逆襲が始まった。

「何のことかしら、私たち友達でしょ？」

「よくそんなナメたこと抜かせるね、つて影明？鳴つてるよ？」

コートの外ポケットに入っていたスマートフォンに着信があった。

相手は・・・非通知。

「はい、もしもし」

『初めましてね、矢崎影明』

聞き覚えのある声、この声の主は・・・

「神崎か、何の用だ」

『手伝つてもらいたいことがあるの、事情は追つて説明するわ。とりあえず・・・あんたの相棒はそこにいる?』

「ああ

『じゃあ、車輛科の車輛整備所まで行つて、場所は判るわよね?』

「・・・何が起きた

『バスジャックよ、あんた達の力を借りたいの』

「了解だ、すぐに向かう」

スマートフォンをポケットに入れて席を立つ、緊急事態発生だ。

「つかさ、行くぞ。仕事だ

「りょうへかい

つかさも戦闘モードへチーンジする。

いつのまにか雨脚が一段と強くなっていた。

第6話 ジャッカス（後書き）

さて次回は原作のバスジャック編へ！感想お待ちしております！

第7話 バスジャック

雨が降りしきる中、影明とつかさは車輛科の車輛整備場へたどり着いた。ここには生徒が使う車輛や武偵高のヘリが格納されている。今もコンクリートで覆われた野外整備場にヘリが待機しているその周囲にはレインコートを着た車輛科の生徒がチェックしているのが見えた。

「矢崎と服部はこっちのヘリだ！」

同じくレインコート姿の蘭豹が2人を手招きする。通常の輸送ヘリの隣にはそれより一回り小さな卵形のヘリが待機していた。

「MH-6ですか」

「そうだ、アメリカ陸軍からレンタルしている

MH-6 リトルバードとは、MDヘリコプターズが生産している軽多目的用及び攻撃強襲用ヘリコプターで観測ヘリOH-6の軍用派生版だ。今回はM134ミニガンを2門装備している。

「ヘリの運転できるの？」

「一応習つた。実際に飛ばすのはずいぶん久しぶりだ」

2人とも武偵高の制服でヘリに乗り込む、本来ならC装備で乗り込むべきなのが、時間がそれを許さない。ヘッドホンを耳に当ててエンジン始動、メインローターが回り始める。隣のヘリが先に飛び立つた。別の着陸地点にいる神崎達を迎えて行くらしい。

「俺達はバスの追跡と接近する脅威の排除か、了解。ホーネット2-1テイクオフ！」

雨の降る中をリトルバードが飛び立つ。事前にバスの特徴を聞いているのでバス自体はすぐに見つかった。

「あれ・・・みたいだね。他の車はいないみたいだけど・・・」

「おそらく警視庁と東京武偵局が封鎖を始めたんだろう、多分、レインボーブリッジへ繋がる高速道路は全面封鎖だらうな」

「珍しく対応が早かったね」

「世論がこれ以上反武偵になられちゃ困るからな。悪性腫瘍に触るネタはこれ以上増やしたくないんだろう」

「世知辛いね~」

「うひこいつときでもつかさが明ること緊張せずにする。

「それはそうと、つかさ、お前今回ヘリの銃手頼むわ」ガンナー

「え・・・・・・・・・?まじで?！」

「俺はこのとおり操縦で忙しいからな。代わりにやつてくれ。なに、そのステイックについてるボタンをターゲットに向けて押せばいいだけの話だつて、照準は自動的にやつてくれるから楽なもんだつて」

「う・・・わかった、やつてみる」

つかさの顔が若干引き締まつたものになる。バスを追うよつに飛行していると先刻発進したヘリがやつてきた。

『ジエスター1-1からホーネット2-1へ、矢崎、服部、聞こえ
てる?』

「いやあホーネット2-1、聞こえてるぜ。状況はあらかた聞いてる。今のところ接近する脅威は確認できない」

『私たちが直接バスに張り付いて爆弾を解除するわ。あんた達はバツクアップよ』

「ホーネット2-1了解」

た。無線交信を追えた直後、バスが進路をレインボーブリッジへ向け

連中、あんなのを都内に入れるつもりかよ・・・?「

「おともじがないね……」

バスが、学園島から離れて、レインボーブリッジを渡り始める。アリア達の乗ったヘリがリトルバードを追い越した。

『あたし達はバスに張り付くわ』

そう言つて、アリアともう1人の男子生徒がバスの上に立つ。ヘリのキャビンからはドラグノフの銃身がのぞいていた。あんな古い銃を使うのはこの学校ではあんまりいない。おそらく狙撃科のスナイパーだ。

ンク武偵、レキを連れてきたのだらう。

「あれは・・・レキだね」

「神崎もいい駒そろえてるな」

そんなことを言つてみると・・・

「影明、ちよつとあれ見て」

つかさが指さした方向から5台の車が走っていた。封鎖中なのに走つているところを見ると、事前に配置してあつた車らしい。しかも5台とも乗り手がいなかつた。

「無人車だな・・・あれは・・・げえ、RPGだ・・・」

無人車には銃が装備されていた。3台がSMGの中ではもつともポピュラーなウージー、残りの2台は対戦車ロケットとしてほぼいつも有名なRPGを装備している。

「ホーネット2-1からジェスター1-1へ、そつちに向かつ車を5台を確認した。どうする?」

『ジェスター1-1からホーネット2-1へ、排除してくれ』

「了解、すぐに始末する。つかさ、出来るな?」

ヘリを大きく傾けて、無人車へと接近する。段々距離が狭まつてきた。

「つかさ、今だ！撃ちまくれ！！」

「わかった！！」

つかさが操縦桿にあるボタンを押した、リトルバードの両側に装備されているミニガンが火を噴いた。最後尾の車輛が鉄屑となる。

「次だ！」

再びミニガンが吼えた、今度は燃料タンクに引火したのか盛大に炎を上げて爆発する、これでRPGを装備している車は破壊できた。あとはウージーを装備している車輛だ。3台のうち2台がバックしながらウージーの砲口をリトルバードへ向ける。

「つかさ！ひるむな！撃ちまくれ！！！」

「任せて！！」

再びミニガンが火を噴いた。平等に無人車へ命中。盛大に炎を吹き上げる。

「残りはどこに行つた！？」

「バスのところへ今撃つたらバスに当たっちゃう！！」

ミニガンが使用する7・62ミリ弾はバスの車体を簡単に貫通する、しかもあの中には武道高の生徒がわんさか乗っているので、流れ弾が直撃すれば大変な事態となってしまう。

「影明！リトルバードをぎりぎりまで近づけて！！！」

「何か思いついたんだな！？」

「うん、それとN4も…！」

「了解だ、乗つてやるぜーー！」

そう言つと影明がリトルバードをぎりぎりまでバスの先頭に寄せる。つかさはガンケースからN4を取り出して、身を少しだけ乗り出しへ片手でN4の狙いをつけた。

「5秒だけ姿勢を安定させて…！」

「任せろ…！」

だが、その前に無人車のウージーがアリアを撃つた。それを参加していた生徒・・・キンジが受け止める。

「今だ！」

影明がリトルバードの姿勢を安定させた。それと同時につかさが片手でN4を撃つた。銃弾は見事にウージーを黙らせる。それと同時にレキがタイヤを撃つて最後の1台を止め、爆弾も吹き飛ばした。東京湾に落下した爆弾が盛大に水柱をあげる中、ようやくバスが止まった。

「一段落つてとにかく・・・降りるぞ！」

リトルバードを着陸させる。バスから降りてきた生徒達が互いの無事を喜んでいるのが見えた。

「よう、大活躍だつたな」

「武藤が、災難だつたな」

「全くとんだ口だぜ・・・つてそれ・・・リトルバードか！？」

「アメリカ軍からのレンタル品だ、壊すなよ」

武藤にそう釘を刺してからキンジ達の方に行くが・・・目の前を救急車が走り去つていつた。おそらくキンジはあの救急車に乗つていつたのだろう。へりに戻るつとして振り向くと田の前につかさがいた。

「今日は見事だつたな、初めてで4台破壊はす」かつたぞ。それと最後の片手撃ちもだ」

最後に見せたアサルトライフルの片手撃ち、あれは誰でも出来る技ではない、片手で撃つには反動が大きいに、狙いがぶれてしまうのだが、つかさは見事にそれをコントロールしきつた。

「えへへ・・・ありがと」

影明に褒めてもらえたのが嬉しいのか、若干照れたようになるつかさ。いつの間にかあれほど激しかった雨は大分収まつていた。

第7話 バスジャック（後書き）

感想待つてます！！

バスジャックが解決してから数時間後、影明とつかさは未だにリトルバードに乗っていた。作戦が終わって、リトルバードを車両科に返しに行つたところで、蘭豹に捕まり、バスジャック犯が潜伏していたと思われるホテルを突き止めたので、鑑識科と探偵科のメンバーの輸送兼護衛として再び飛び立つこととなつたのだ。

強襲科の生徒は基本的に戦闘がメインなのでそのほかの技術・・・通信や運転が出来ない者が多いため、Sランクの生徒なら、単独でもある程度こなせるのだが、アリアやレキのように扱いづらい生徒が多い。そのために影明とつかさに鉢が回ってきたというわけだ、蘭豹曰くAランクで扱いやすいし、そのほかの技術も取得している、おまけに腕も立つからこういった仕事にはうつてつけだと言つていた。

「これが終わつたら休ませてもらひからな・・・明らかに超過勤務だろ・・・」

「影明、若干死亡フラグ立つてるよ」

現在リトルバードはお台場の上空を飛行しているが、現在は作戦で使つたミニガンから着脱式のベンチシートへと変更されている。

『「ひひやーーかーくん、これすっげく楽しいねーー!』

現在ベンチで騒いでいるのは探偵科の峰理子。影明やつかさと同じ2年A組のメンバーで変なあだ名で呼ぶ癖がある。かーくんもその一つらしい。リトルバードの外のベンチに座らせたのは失敗だった、と影明が軽く後悔している。

「落ちるなよ・・・落ちても知らないからな」

『そこはちゃんと助けてくれるって信じてるよかーくん』

そんなことを話している内に潜伏先と思われるホテルの屋上に到着する。探偵科インクスタの生徒はある程度武器が使えるので先に突入して中の安全を確保。その後に鑑識科ヒューリの生徒が調べに入る、という手順だ。帰りは近くで任務から武偵高に帰る途中の車輛科ロジのトレーラーにリトルバードを乗せてくれるらしい。

「各機屋上に到達した、行くぞ！」

今回は影明とつかさも突入要員として参加する。N4を持つビルの屋上から突入する。他にも武偵高のヘリからラペリング用のロープで数人の探偵科インクスタの生徒が降下する。目的の部屋は22階にあつた。

「・・・行くぞつかさ、3・2・1、

「「GO!!」」

ドアを開けて中へと踏み込む、既に犯人は撤収したあとらしい。

「トライップの類はないらしいな」

「みたいだね」

「よし、ここから先は探偵科と鑑識科ヒューリに任せる。無いとは思つが何かあつたら呼んでくれ」

そう言つて2人が部屋をあとにする。車輛科のトレーラーがやつてきたのでリトルバードをトレーラーに乗せる。先に運んでくれるらしいのでトレーラーを見送つてからホテルの玄関近くで待つことにした。

「影明、今回のバスジャック……どう思つ?」

「狙う時間帯からみれば、かなり悪質だな。一步間違えればあのバス軽く吹き飛んでただろ? からな」

「それと、これって武偵殺しに似てないか……って噂が流れてるんだよね……」

「ああ……そつか、武偵殺しか……」

そう言つと影明は鞄から封筒を取り出した。

「それは?」

「警察庁指定 広域指定1337号事件の資料だ」

「それって……武偵殺しの?」

「ああ」

「どうでそんなの取つてきたの……?」

若干呆れたよつになるつかさ。資料を交えつ影明の話が始まつた。

「日本に武偵制度が導入されてから3年、20XX年3月22日に東京武偵局の武偵がバイクに仕掛けられた爆弾で全治3ヶ月の大怪我をしたのが始まりだ」

「最初はバイクなんだ」

「2件目は9月18日、同じ東京武偵局の武偵が自動車に仕掛けられた爆弾で負傷、車は跡形もなく消し飛んだそうだ」

「・・・よく生き残ったね・・・」

「武偵殺しには謎が多い。目的も、要求もなかつたんだからな。で暫くして犯人が逮捕された。犯人の名前は神崎かなえ・・・ん？」

「どうしたの？」

影明が若干首をかしげた。

「いや・・・最近似たような名前をどこかで見たような・・・」

「

「神崎・・・神崎・・・あ・・・」

「どうしたつかさ」

「この人って・・・神崎さんの母親じゃないー？」

写真の人物と、記憶の中のアリアを比べる2人、髪の色などは違うが、確かによく似ている。

「家族構成は・・・あつた、これじゃない？」

別のページに載っていた写真を見せる。今もなお裁判が続いているらしい。

「武偵殺しに関する資料は・・・これだけ？」

「・・・に乗つてる範囲内では・・・な」

「ずいぶんと含みのある言い方だね、まだ何かあるの？」

「これだ」

「浦賀沖豪華客船沈没事故・・・これつて、このまえの？」

「ああ、この前地獄に送つてやつたバカの事件だよ。行方不明者リストのところを見てみる」

「武偵1名が行方不明・・・これつて・・・」

「可能性犯罪つてあるだろ、このままで巨大な豪華客船だ、もつと死人やら行方不明者が出てもおかしくないのに事故の規模に対して犠牲者が少なすぎやしないか？」

「・・・確かに・・・」

沈黙が2人の間に落ちる。あの事件で一時、武偵制度の撤廃などが真剣に国会で考えられていた時期もあつたという。

「この国はクズだって外国から言われるんだよ……」

「私も……時々そう思つことがあるよ。中学の頃、私たちのクラスにモンスター・ペアレントが来てね。近くにいた私に絡んできたの、『こんな下品な生徒のいるような学校で内の娘は学ばせられません』って『多分無意識だつたんだろうけど、無責任だよね……』

「で、どうした? つかさのことだから鼻の骨でもへし折つてやつたか?」

「ううん。娘諸共鼻水垂れ流して『ごめんなさい』って言つままでボコボコにしやつた。確か娘のほうは……右足が複雑骨折、母親の方は両腕脱臼させてから、両足が使えないレベルまで痛めつけて、父親はあはり全部折つちやつたかな。若氣の至りつてやつ?」

「おつかれ、傑作だな。俺でもそこまでやつた」と無むごぞ

爆笑する彰明、一般的の生徒なら咎めるところなのだろうが、むしろおもしろがつていい。

「嫌いになつちやつ?」

つかさがいたずらっぽく微笑んだ

「いや、悪くないな。思い上がつたバカには暴力が一番効く……それで、そろそろ学校に帰るか」

「りょーかい 」

若干場の空気が柔らかくなつた。しばらくするとエレベーターが開いて撤収していく鑑識科レヒアや探偵科インクエスターの生徒達と共に2人も武徳高へと帰つて行く。

「それと、アサルトライフルは近い内に持つて来てもらつからな」

「わかつた、ありがと」

いつの間にか夜になつていたらしく、雲が晴れて月が地上を照らしていた。その中を2人が帰つて行く。長い1日がようやく終わろうとしていた。

第8話 武偵殺し（後書き）

主人公とメインヒロインですが数本頭のネジが飛んでいってます。十中八九悪役ですね。キンジ達を基準に考えた場合はそうなります。ネジの飛んでいった者同士、惹かれあうところがあるのかかもしれません。

しばらくは受験もあるため更新がストップしてしまいます。『そんなこと書く前に受験勉強しろよ！』というツッコミはなしの方向でお願いしますね（笑）それでは、感想お待ちしております！！

第9話 台風の夜

アサルト強襲科では、基本的にノルマをこなしたあとは自由とされている。これは戦闘中発生しうるあらゆる可能性に臨機応変に対応するための訓練なのだが、蘭豹なんかはこれを悪用して、5分ほどで終わるノルマを出して自分はどこかでサボっている。こういうときだけ蘭豹は頭がよく回る・・・と感心せずにいられない影明だった。現在つかさが使っているのはH&K HK417なんのことはない、HK416は5.56mmだったがHK417は7.62mm・・・口径が大きくなつただけだった。つかさ自身も納得しているらしい。

「俺も、7.62mmの銃に変更するかねえ？」

「いいんじゃない？」

「」Jなど、SR-25平賀に頼んでカスタムしてもらうか・・・

「そういえば、影明つてARとSR以外にどんな持つてるの？」

「ん? SGショットガン、SMGサブマシンガン、LMG、アンチマテリアルライフルアサルトライスチャバーライフルらしいだな」

「それは日本国内で撃つて大丈夫な代物なの？」

「自分の頭に坑開けられるよりは遙かにましだと思わないか？」

日本はアメリカと違つて銃器に関する規制が厳しい、アメリカなら腕のいい狙撃手はその手の雑誌のトップを飾り大手の銃器メーカー

ーがスポンサーに付くことだつてある。だが日本ではやうこつたことはない、むしろ銃を忌避するような傾向だ。

「警察にしろ、この国の武僧にしろハンドガンとSMGだけで犯罪者を制圧出来ると思つてゐる連中が多すぎる。一応最近じゃ犯罪者サイドもある程度武装してゐるからな。警察の護送車なんか5.56mmでも孔が開くぞ」

「あ、それはこの前聞いた。たしか車輛科の護送車が武装した強盗に襲われてレインボーブリッジの上で横転したやつでしょ？」

「実際見てるなら話は早いな。だから俺はこゝまで過激なんだよ」

「なるほどね～」

やつこつ2人は出でくるターゲットを撃ち倒していく。

「そういえば、昨日から神崎見てないな」

「あ、たしかに」

マガジンチョンジ、新しいマガジンを送り込む、喋つていてもだらけでいいし無駄がない。プロの動きだ。

「あとでキンジにでも聞いてくるか」

その時、急に校内放送が入つた。

『矢崎彰明くん、服部つかせさん、至急教務科まで来てください。
繰り返します・・・』

いきなり2人の名前が呼ばれた、嫌な予感しかしない。

教務科 14:35

武偵高でも危険な場所ランギングに入っている教務科の扉を叩く2人。

「失礼します」

「おう、入れや」

蘭豹の声がしたので部屋の中に入る。そこには蘭豹ともう1人スーツ姿の男がいた。

「じゃあ、説明すつぞ。今から20分ほど前、こちらにいるヴァンデイン・ネクスト・コーポレーションの社長の息子が拉致された。相手はかなりの重武装だから普通の武偵を送り込んだら間違いなく死体になる、そこで、お前らの登場だ任務の内容はわーってるよな？」

「そこに突入して奪い返してこいつてどころですかね？」

「そうだ。出来る限り早くね！」

「武装の度合いは？」

「・・・何でも使え。人質以外は傷つけても大丈夫だ」

「了解、すぐ準備に掛かります」

そういうて、部屋を出る2人。

「で、影明。どうするの？」

「重武装でいって言つんだろ？」

「うん」

「じゃあ、戦争だ」

そういうてえげつない笑みを浮かべる2人。誰が見ても一步引いてしまうよつた、頭のネジがぶつ飛んでる人間がする笑みだつた。

アムド
装備科 専用ロッカー

アムド
装備科のロッカーから次々と装備を出していく。今回使用するのは・・・バレットM82A1カスタム、アンチマテリアルライフルの中では装弾数が多い。影明のバレットは標準装備されている2脚を外してダネルMG-Lを銃身に装備している、もう一つの武装はM P S A A - 1 2、外見は何とも言えない微妙なデザインだが、威力は凄まじく、フルオート射撃も出来る専用の32発入りドラムマガジンの他にフラッシュマガジン一体型グリップも装備している。銃のフレーム全体に米軍が使用しているA P C迷彩がペイントされている。

つかさは影明から渡されたベネリM4スーパー90と、アメリカ軍で採用されている分隊支援火器M249、ショットガンとLMGというかなり過激な武装だつた。それ以外に影明はいつも通りN4を持って行く。ハンドガンはいつものものを持っていく。防弾制服

の上に影明は黒、つかさは白の防弾ロングコートを羽織つたら準備完了だ。

「さて・・・始めるか

「りょうかーい

V-MAXに乗つてバイクを走らせ始める。社長の息子に持たせていたGPS付きの携帯電話で位置が特定できた。GPSの電源を切つていないとこらを見ると、どうやら相手は素人の集まりらしい。誘拐をするときは自分の位置がばれるようなもの・・・この場合は携帯の電源を切つておくべきなのがそれすら出来ていない。場所は羽田空港内の使われなくなつた航空機整備場だった。台風が近づいているらしい。雨がいつの間にか雷雨になつていた。

第9話 台風の夜（後書き）

さてようやく1巻も佳境に入つてきました。時間的にはキンジが理子とエスターらにいる頃ですね、次回はちょっと気合いの入った銃撃戦になるかもしれません。お楽しみに！

第10話 銃弾演舞（前書き）

大変長らくお待たせしました、申し訳ありませんーー！

第10話 銃弾演舞

雨の降りしきる中を重武装の2人がバイクに乗つて駆け抜ける。

「もうすぐ目的地だ、準備は？」

「ぱつちりー！」

そういって笑顔で答えるつかさ。じつにうときの彼女は本当に生き生きとしている。

「さて、行くぞ」

バイクを降りた直後、V-MAXに大量の銃弾が直撃した。燃料タンクに引火するとマズイので距離を取る。近くにあつた整備用車輌の影に2人は身を隠した。

「ああ・・・」

悲しそうに呟く影明だが・・・

「テロリスト風情がよくも・・・よくも、俺のV-MAXを潰してくれたなー！」

ライフルケースからバレットを抜くと、銃撃のあつた方へ向けて12・7mm弾を撃つ。慌てて出てきたところにつかさがM249で脚を打つて動けないようにする。テロリスト側も反撃してくるが有効打になつていない。影明のバレットに装備されたグレネードラ

ンチャードが火を噴いた。次々とテロリストを吹き飛ばしていく。整備用車輛から離れて2人は堂々と敵の前に姿を現した。整備場の前にはバリケードが出来ていたが容赦なくバリケードを碎いて前進する。

「・・・教祖様はお前ら風情に負けはしない・・・権力にしつぽを振る走狗め・・・世間が許しても、我らは貴様らを」

「うひさい」

何か言おうとした構成員に容赦なく至近距離からつかさが持つていたベネリの弾を食らわせる。暴徒鎮圧用の強化ゴム弾だが当たると凄まじく痛かつたりする。整備場に入ると何十人ものテロリストが銃を片手に襲いかかってきた。明らかに2人に対する人数としてはやりすぎだが、それでもしないとこの2人は食い止められないと思つたのだろう。だが・・・。

「その人数で勝てると思つてゐあたりまだまだだな」

「だね」

この二人は彼らが想像していた以上に化物だつた。構成員たちは狩りになることを恐れていたがその心配はなかつた、狩る立場と駆られる立場が見事に逆転している。十倍近い構成員たちを一人が一方的に狩つてゐるからだ。

「死にたくないりや、とつととボスのところに案内しり」

試しに影明がそいつたが動く気配は無し、強行突破決定だ。バレットを投げ捨ててM P S A A - 12に持ち替える、接近していく

る敵にフルオートで散弾を叩き込んだ。つかさもM249をフルオートで撃ちまくる。接近していた構成員を倒してさらに奥へと進んでいった。

「しつかじこいつらどうから湧いてくるんだ?」

AA-12のマガジンをチエンジしながら影明はつかさに話しかけた。

「それは・・・考えるだけめんどくさい?」

返ってきた答えは概ね影明の予想していたものだった。考えるだけ時間の無駄だ。

「確かに」

そういうながらも銃弾を打ち続ける手は止めない。接近して鉄パイプで殴ろうとしていた老人の脚を撃つ。AK-47を持って接近してきたいたエリート学生らしい青年や女性を撃つ、ここにいる人間は世間に對して何もしなかつた人間だ。不平不満を言うだけ言って警察や武偵に護られてきた人間達だ、それがどこの誰だか知らないうが、その不満を煽つて世間に對する怒りを増幅させてこういう行動に駆り立てる。同情する気なんて全くないし、こういうバカは死んだ方がいいとさえこの2人は思つている。それでも2人は武偵なので殺せない、だから、なるべく残酷で痛みの残る倒し方をする。その方が教訓になるからだ、だから影明とつかさは撃つ、撃つ、撃つて撃つて撃ちまくる。弾丸の雨を降らせに行つてバカどもに鉛弾を叩き込む。気が付くと格納庫内には血を流しながら苦しむテロリストの姿だけだった。並の武偵なら拒否反応が出そうなものだがこの二人はそうではなかつた。

「結局いつものプラッドバスか」

「ほんとだね」

埃っぽい格納庫を歩きながらそんなやりとりをする。外では雨が打楽器のような音を立てて降っていた。

「にしても・・・親玉はどう行つたんだろ?」

つかさがそんな疑問をこぼした、この一人がここに来たのは誘拐された社長の息子の救出とインチキ宗教団体の壊滅、その指導者の捕縛だった。一つめの依頼は難なく片付いたが二つめの依頼がまだ完遂されていない。この羽田空港のどこかにいるはずなのだが・・・。そう一人が考えていたとき、影明があるものを見つけた。

「なあ、つかさ。あの小型機・・・怪しくないか?」

影明が指さした先にあるのは今にも離陸しそうな1機の小型旅客機。慌てて数人の人間が乗り込んでいる。そしてその飛行機の周りには学生や老人がAK-47で武装していた。そして大慌てで白衣を着た50歳代の男が急いで飛行機に乗り込んだ。

「あれが教祖様・・・じゃない?」

「かもな」

そう言つと、弾丸の切れた銃を捨てる。影明は「ゴールドコンバット?、つかさはGSRを両手に持つて突撃を開始した。二人の接近に気がついた数人の信者が彼らに銃を向けるが相手が撃つよりも早

く、一人の銃が信者に叩き込まれた。タラップを掴んで機内に突入する。座席に座つて一安心していた教団の幹部達を銃弾で黙らせた。近くには写真で見た子供が座つている、やはり親玉とセットで動いたようだ。すると、教祖らしき優男が激昂して銃を取り出した。歌舞伎町あたりで安売りされていそうなリボルバーだ。

「君たちは本当に武偵か！？私たちの信者に何のためらいもなく鉛玉を撃つておきながら・・・！」

「信者を都合よく利用していたやつとは思えない口ぶりだね」

つかさがGSRを構えながら言った。

「私の信者を撃つた事を何とも思つてないこんな輩が多いから日本の犯罪は減らないんだ！ いつそのこと武偵などという思い上がった連中が多いからこの国はいつこうに平和にならないんだ！」

口から盛大に唾を飛ばしながら教祖が叫ぶ。

「じゃあ、この前台場でドンパチやらかしてたのって武偵校を潰すためだつたんだー」

「それ以外に何がある！？ 刀で斬つたり銃を撃つしか脳のないサルどもの巣窟をたたきつぶして何が悪い！！」

「つかさ、そろそろ面倒になってきた。黙らせるか

影明がそう言つと同時に教祖に向けて「ゴールドコンバット？」を撃つた。情けない悲鳴を上げながらのたうち回る教祖の男。

「じゃあ言つておいてやる。お前みたいなアホな考え方の奴らが減らないからいつこいつに犯罪は減らないんだよ。また蘇つてアホなことを企んでみる、今度はお前の前進に弾丸叩き込んでその不細工な顔を整形してやるからな」

「鉛玉で整形してもらつたらちょっとは考え方変わるんじゃない?」

二人がそう言つてさらに教祖に弾丸を撃ち込んだ。痛みのあまり教祖が意識を手放す。飛行機のパイロット席にいた操縦士も捕まえて探偵科インクエスターと尋問科ダギュラに引き渡す。誘拐された会社の息子は気を失つていた。万が一ということもあるので衛生科メディカルの生徒にも来もらつた。氣絶していて助かつたと影明は思つ、子どもには刺激の強すぎる光景だからだ。

「あーで、よつやくおわつたね!—」

つかさが大きく伸びをした。雨脚は空港に来る前より激しくなつてゐる、鑑識科レジアの護衛も兼ねて、二人が周囲を見渡していると・・・いきなり自衛隊の車両が何台も空港の敷地内に入つてきた。普通のトラックに紛れて〇三式中距離地対空誘導弾を装備した車両まである。

「ねえ、影明。あれつて・・・対空車両だよね?」

「よく氣づいたな、しつかしまー、なんだつていうんだ?」

「ホールのポケットからPDAを取り出して武藤に掛けた。

『影明が、どうしたんだ?』

「どーしたもーーしたもねーよ、武藤。今羽田にいるんだが・・・いきなり自衛隊がやつてきたぞ? しかも中SAMまで持ち出してきてやがる。何かおきてるのか?」

『落ち着いて聞いてくれよ、ついでに羽田を飛び立つたANA600便に武偵殺しが現れたんだ』

「ほー、それで?」

『・・・、こつほど驚かねえんだな・・・まあいい、でその飛行機の中に、神崎とキンジが乗つてるって分かったんだ』

「ああ、大分読めてきた。その旅客機どこか損傷してるんだ?」

『ああ、4つあるHنجンの内、内側の2基が潰されてな。今引き返してるとこりだ』

「あらら、そりや大変だ」

武藤と話をしている間に、次々に3式が展開していく。それを見ている内にある可能性が影明の中で浮かび上がった。

「武藤、まよいぞ」

『何がまよいんだ、影明』

「陸自の高射特科が出張つてきてるつーこと、連中、羽田には降りさせないつもりだ」

『なんだとー?』

「とりあえず、俺たちも今からそつちに戻る。今どこにいる?」

『2年1組の教室だ』

「了解、そこで待つてろよ・・・つかさ、やばこことになりそりだ、戻るぞ!..」

「なにがあつたの!?』

「時間がない、車の中で話す!..』

PDAをコートのポケットにしまいながら影明が言つ。鑑識科の
乗ってきた車の1台を借りて二人は羽田を後にした。雨脚は、さら
に強くなっていた。

第10話 銃弾演舞（後書き）

お待たせしました、第1巻も佳境に入っています。今回影明が使っていたバレットはブラックラグーン8巻でロベルタが持っていたタイプです。原作でもキンジがレキの持っていたノーマルのバレットを気にしていましたが、こつちはそれどころじゃない・・・凶悪すぎるだろ主人公（笑）メインヒロインのつかさも「MG持て盛大に暴れまくってきましたね。

1巻の内容はあと少しで終了ですので、少し話を挟んでから2巻の内容へ入っていきたいと思っています。では感想お待ちしております。それでは！！

一巻終了まであと少し！

第1-1話 ハードランティング

武偵校についたとき雨はかなり激しく降っていた。校舎の前に止めて全力で階段を駆け上がり、廊下を激走する。

「武藤、戻つたぞ！」

「同じく…」

教室のドアを引くと数十人の生徒が無線機の前にかじりついていた。周波数は航空無線になつていて、無線の向こうでは管制官達が慌ただしく動いている声が聞こえていた。

「戻つたか、影明、服部」

「武藤、600便は今どこを飛んでる？」

寄せられた机の上には東京湾を中心に東京、神奈川、千葉の地図と、レーダーが置かれていた。

「今は…ここだ。盛大に燃料漏れを起こしてから羽田に戻つてきてる最中…」

現在飛んでいる地点は羽田空港からそれほど離れていない空域だつた。だが、その時、無線に新たな男の声が割り込んできた。

『ANA600便。こちらは防衛省、航空管理局だ。羽田空港の使用は許可しない、現在自衛隊によつて封鎖中だ』

「何いつてやがる！」

武藤が無線に向けて砲えた。

『誰だ』

「俺は武藤剛氣、武慎だ！ 600便は燃料漏れを起こして、飛べてあと十分なんだよ！ 代替着陸なんてどこにもできない、羽田しかねえんだ！」

『私に怒鳴ったところで無駄だぞ、これは防衛大臣による命令なのだ』

冷酷に言い放つ航空管理局の局員。影明が武藤から無線機を受け取ったそのとき……。

「みんな！ レーダーを見て……」

レーダーにかじりついていたつかさがいきなり叫んだ。クラス中の生徒がレーダーの前に集まる。

「どうした、つかさー？」

「……なにかが高速で接近してゐる……速いよ……」

レーダーに表示されているのはつこせつさまで3機だった。AN A 600便とその誘導機であるF-15J、だが今はそれに加えもう一つ光点が増えていた。つかさの言つとおり信じられないスピードで3機の方に向かっている。この速さは……戦闘機だ。

『何を言つてゐるんだ?』うちのレーダーでは何も……』

その直後、さつあつた光点の内2つが消えた。影明達が窓の外に張り付くと闇に包まれた東京湾上空で2つ、爆炎の華が広がつた。そして再びレーダーを見ると、光点はいつの間にか消えていた。どうやらステルス戦闘機らしい。

「護衛機が撃墜されたのか……」

『……やつてくれたな』

『さしあつて同僚がつぶやいた。

「残念ながら俺たちのせいじゃない。旅客機もろとも始末しようとしたあんたらに天罰が下つたんだらうさ。あの散り方じや緊急脱出する前に機体と一緒にさよならだる、あんな命令をしなければあのパイロット達は死なずにすんだかもな」

さつて無線を切つて武藤から携帯電話を受け取る。

「よつ、キンジ。なにがあつた?』

『影明か。相変わらず冷静だな。つこせつき護衛のイーグルが撃墜された。じつに被害はないよ』

こつもとは若干キンジの声のトーンが違つ、せつや時折たまに見る覚醒モード。じつ。

「そりやビーも。羽田は封鎖中だとわ、せいで降りる?』

数分の沈黙の後、キンジが口を開いた。

『……メガフロートに降りようと迷つ』

その一言で、影明はキンジが何をしようとしているかを理解した。

「なるほど……『空き地島』の方に降りるんだな？」

『せつよ、あんたって頭もいのね、馬鹿キンジとは大違いだわ』

「これは……キンジの彼女様じや『わざこませんか』

『ああああんたも風穴あけられたいの……』

「それは勘弁して欲しいんだが……どうすりかのキンジ、あやじにはまともな誘導装置がないぞ？」

影明の言つ通り、空き地島には誘導装置どいろか誘導灯すらない、一步間違えれば乗客と共に600便は東京湾に沈む。どうすべきか……やう思つていたとき武藤が立ち上がりてクラスに残つている面子に指示を出した。

「全員装備科にアムドについて懐中電灯と照明機材借りてこい……」

「わかった！」

「まかせろー！」

互いにやう言いながら次々と教室を出て行く生徒達、武藤もそれ

に続いて教室を出る。

「つかさ、俺たちもいぐわ」

教室を出て、^{アームド}装備科の建物へと駆け出す一人。

「何を取りに行くの？」

「つい最近平賀にあるもののテストをしてくれって頼まれてな。 それのテストをしに行こうと思つ」

「あるものって？」

「AT-4やスティングガーでも発射可能な照明弾だ。 テストにはちよつといいシチュエーションだろ?」

「なるほどね」

そう言いながら^{アームド}装備科の建物に駆け込む一人、 レインコート姿の生徒の中から文を見つけ出した。

「どうしたのだ?」

「平賀、この前の照明弾のテストを行つてくる。 弾はあるか?」

「おお、いよいよテストなのだ!」

嬉しそうに平賀が語り。 照明弾と発射用のスティングガーを抱えてついたき、校舎の前に駐めた車に乗り込んだ。 フルスピードで高速道路を走る。 レインボーブリッジ近郊は警察が封鎖していたが何

とか通り抜けて橋の中央へ。

雨が降りしきる中、600便の翼端が見えてきた。都内の明かりで機体が何とか見えている上にかなり低高度で飛んでいた。ステインガーに照明弾を装填して、車の外に出る、雨が一人を濡らすがそんなことは気にしない。PDAはキンジにつなげる。

『影明か?』

「おひ、今から明るくしてやるからな。しつかり降りて来いよ、撃て!!」

「まかせて!!」

一人のステインガーから同時に照明弾が放たれた。600便の遙か上空で照明弾が輝いた。

『見えるわ! いけるわよバカキンジ!!』

「下でお前らを待つてる奴がいるー! きつちり決めるー!」

『言われなくともそのつもりよ!ー!』

アリアが影明達に砲える。轟音と共に600便が空き地島へと着陸した。そして・・・。

「あれ・・・止まらないんじゅ・・・」

「いや、止まるぞ」

影明が確信を含んだ声でそう言った。それと同時に600便が空

き地島の風力発電の風車にぶつかつた。ようやく止まつたところで緊急用の脱出用シートから次々に乗客が出てくる。生還を喜ぶ声があちこちから聞こえていた。

「ま、これにて一件落着つてとこりうだね！」

「もうだな、もう何発か打ち上げとくか！」

再び影明とつかさがステインガーを構える。無茶苦茶な着陸を祝う花火のように空に向けて照明弾を打ち上げた。雨はいつの間にか止み、空には星が瞬いていた。

第11話 ハードランティング（後書き）

では、感想お待ちしております！！

第12話 独唱曲の友達（前書き）

1巻終了！

第1-2話 独唱曲の友達

第1女子寮 21:26

あの後、簡単な事情聴取を受けたアリアはキンジの部屋を後にし
て、女子寮の屋上で待っているヘリに向かつて行った。このヘリに乗
つて沖合で待機しているイギリス海軍の空母まで飛んで、そこから
艦載機でイギリスまで戻る。未練はあつたが・・・仕方ないとアリ
アは思つていた。トランクを持って女子寮の屋上に上ると・・・
そこには意外な人物がいた。

「あんた・・・」

ヘリポートにいたのは武偵校の制服の上に黒い軍用ロングコート
を羽織つた少年・・・矢崎景明がいた。

第1女子寮ヘリポート 21:10

景明がメールで呼び出されたのはついに數十分まえのことだった。
そのメールに従つて屋上へと向かうと、ある男性が立つていた。

「よう、ジョーカー、元気にしてたか?」

「マクダヴィッショ大尉、どうしたんです。こんなところで

「ん? こいつらの護衛でね。こつちまで出張つてくることになつた

そう言つてにやりと笑うソープ。

「武偵殺しは結局捕まらなかつた・・・か」

「すみません大尉」

「なに、お前が謝ることはないさ。お前が現場にいたわけじゃないしな。でも、お前だつて使えたはずだろ？例の権限、少なくとも在日米軍くらいは動かせたはずだぜ？」

「一応『』では『しがない』アランク武偵』つてことで通しておきたいんですよ」

景明もへりにもたれながらそつソープに返す。

「お前も大変だな」

「ですね」

「そう言つて二人が笑つた。

「そつちでは何か動きはありましたか？」

「現在は『魔剣』を最優先で追撃中だ。この前もエジプト近郊で追いついたんだが・・・な。取り逃がしちまつた」

「確かにエジプトってあるお姫様の根城じやありませんでしたっけ

パート二

「いや、今あの砂のお姫様は行方不明だとさ、ビコにいるんだかね・
・」

そう言いながら空を見上げる一人、その時屋上の扉が開いてピンク色のツインテールの少女・・・神崎・H・アリアが現れた。

「やつぱりあんた、TF141の隊員なのね」

「すいぶん前から知つてただろ。ホームズ家当主?」

「やつぱりばれてたわね・・・」

トランクをヘリに積み込みながらアリアがそう言った。

「あいつのことはいいのか?いいコンビだつたと懸つんだが・・・」

「いいの、そろそろ出発しましょ、ここでの生活も楽しかったわ、あんたみたいなのも知り合えたし、じゃあね、景明。それとつかさにもいつておいて、仲良くしてくれてありがとうって」

「分かつた、そう伝えておく」

そういうてアリアがヘリの座席に座つた、それと同時に他のスース姿の男達・・・ロンドン武偵局の武偵もヘリに乗り込んでいく、メインローターが風を切り裂く音が響き始めた。

「またな、ジョーカー」

「了解です、大尉」

ソープがヘリに乗り込んでホバリングし始めたとき・・・屋上のドアが開いた、肩で息をしている少年は彼の友人であるキンジだつた。アリアに向けて精一杯叫ぶ。それ待つていたかのように、キ

ヤビンからアリアが飛び降りた、それをキャッチするキンジ、だが、連れ戻したがっていたロンドン武偵局の武偵達がロープで屋上に降下してきた。ソープも一緒に降下していく。

「キンジ、アリアをつれて走れ、時間稼ぎへりにはしてやる」

「ありがとうな、景明」

屋上からワイヤーを使って下りていくキンジを見送った。景明の隣にソープが立った。

「どうする、ジョーカー相手はいつも数倍の数だぜ？」

「俺達にしてみればいつも通りですよ。じゃ、行きますか大尉！」

「おひ、遅れるなよ……」

ヘリから降下してきたソープと共に景明はアリアを連れ戻そうとしているロンドン武偵局の武偵に向けて駆けだした。

台風が過ぎ去った翌日、バイクが壊れたので久しぶりにバスで通学した。自転車を武偵殺しにこわされてバスで通学通学しているキンジとアリア。免停中の武藤と他愛のない話をしながら学校に向かう。だが、2年A組の教室に入ると・・・朝だというのにそこは戦場と化していた。数人の女子グループ vs つかさという構成だ。女子グループの方はこのクラスで何度も見た顔だった。巻き添えを食らわないようにほとんどの生徒は教室の外に出て成り行きを見守っている。

「助けに行かなくていいのか。パートナーなんだろ?」

キンジがそう景明に尋ねた。

「あいつはそういう簡単にやられるほどヤフージャなこち」

「随分とパートナーを買つてこいるのね」

アリアもことの成り行きを静かに見守つていた。

「何よ、私たちとの関係を終わりにしておつていい。」

「それ以外に何があるっていつのよ。群れることしか脳のない三流が」

「パートナーができたからつて調子に乗らないでよ、」Jのクズが!」

そう激昂しながら相手が銃を出す。SIG P226つかさが元々使っていた銃だ。だが、つかさはGSRを抜くことなく相手に迫る。相手の少女がひるんだ好きに銃のスライドをめいいつぱい引いてスライドをはずす、そしてマガジンキャッチを押してマガジンを抜いた。時間にしてわずか数秒のことだ。だが、つかさは鮮やかな手つきで銃を分解、使用不能にした。そして・・・ようやく景明達が動く、つかさの隣に立つて景明が宣言した。

「こいつは俺の相棒でな、今後手を出そつものなら・・・俺も一緒に相手することになる。そつそつ

勝てると思つなよ」

そう言つと、女子達は自分のクラスへと帰つて行つた。

「さて、つかね、いいやーつお知らせがある。お前と友達になりたい奴がいるそうだ」

「誰？」

「あたしよ」

つかさの前に出てきたのはアリアだった。柄にもなく顔を赤くしている。

「私、今まで友達なんて作ろうとも思わなかつたし、いらないつて思つてたんだけど・・・あたしの友達になつてくれる・・・？」

それと同時に朝の教室に盛大な拍手が響き渡る。こうして、彼らの新しい日常が始まった。

第1-2話 独唱曲の友達（後書き）

第1巻の内容はこれにて終了です。これから戦姉妹の話を挟んで、第2巻は原作に介入する気力がないためオリジナルストーリーになる予定ですが・・・ちょっと意外なストーリーになるかもしだせん。では感想お待ちしております。それでは！！

第12・5話 景明とつかさの戦姉妹育成日記

4月29日 東京都台場 倉庫 20:16

夜の帳が降りた倉庫街の中をあかり、志乃、ライカ、麒麟の4人が走る。彼女たちの後ろからは数十人の男達が迫りつつあった。

「前からも来てる、応援はまだなのかよ、あかり！」

ライカが弾の切れたM4をスリングで掛けながらサイドアームのSIGザウエルSP2022を目の前の敵に向かって撃つ、相手の落としたアサルトライフル、ベレッタRX4“ストーム”を拾う、弾薬の状態を確認してから再び走り出す、あかりがこのミッションにでる前、装備科から借りてきたM4CQB-Rを撃つた。彼女たちが受けたミッションは夜の倉庫街の警備だったが、現場では武器取引の真っ最中だったため、こうして追われる羽目になってしまったのだ。既に武偵校には援助を求めるメールを出していた、教務科からの返事は近隣で活動中の生徒をすぐに向かわせることだったため、彼女たちはその合流地点まで走っているところだった、ようやく目的地が見えてきた、そこに立っているのはたった一人だけだった。

「二人だけ！？」

あかりががっかりしたような声を出したがライカは違った。

「安心しろよあかり！あの二人ならそちらの強襲科の先輩よりもす
ごいぜ！…」

「え・・・？」

あかりが再び目をこらしてその姿を見る片方の男は防弾制服の上に黒いロングコート、もう片方の女の方は防弾制服の上に白いロングコート、東京武偵校でみんな服装の人物は・・・あかりのなかではあの二人しか思いつかなかつた。数日前、台風が直撃した夜、たつた二人だけでインチキ宗教団体を壊滅させ、誘拐された大手軍事企業の息子を救出した先輩・・・矢崎景明と服部つかさだつた。景明が持つてているのはアメリカ特殊作戦軍の要請によって製造された、M249の派生型、Mk-48 Mod0、口径はMINIMIの5.56mmから7.62mmへと強化されている。レールにはACOGサイトにレーザーサイトとバイポッド二脚、フラッシュマガジンに伸縮式のストックを装備していた。つかさが持つてているのはアメリカ海軍SEALsに採用されたM60E4の重心を短くしたモデル、Mk-46 Mod0、レールにはドットサイトにフォアグリップ、レーザーサイトを装備している。あかり達の後ろから迫つている敵に向かつて二人がLMGを盛大に撃ち始めた。二人の後ろには大型のバンが停まつていて、既にスライドドアが開けられている。

「走れ走れ走れ！」

「ゴールまであと少しだよー！」

どこか緊張感の欠けたその声を聞きながら四人はバンの中に乗り込んだ。あかり達が乗つたのを見届けると景明達もバンに乗り込んだ。

「よし、武藤出せー！」

「任せろーーー！」

景明の合図と同時にバンが倉庫街から猛スピードで発進する。

「・・・全員怪我とかはないよな?」

「ありません」

「わたしもです」

「あたしも」

「ありませんわ」

四人とも制服が汚れているくらいで大きな怪我などは見受けられなかつた。

「全員無事で何よりだね」

バンがいつの間にか高速道路に入っていた。窓の外では港の灯りが流れているのが見える。

「あ、矢崎先輩、服部先輩」

急にあかりが思い出したかのように口を開いた。

「ん?」

「どしたの?」

「私たちのクラスに、先輩達と戦姉妹^{アミガ}契約したいって娘がいるんですけど・・・」

「「はあ?」」

「の二人にしては珍しく、間抜けな返事が返ってきた。

4月30日 東京武偵校 アサルト
強襲科第3射撃場

昨日の救援要請から一晩経った次の日の5時間目、景明とつかさ、アリアは射撃場にいた。蘭豹はいつもの如くどこかへ行ってしまっている。現在は射撃場で射撃訓練をしている最中だった。今日、景明が持っているのはM14EBR、アメリカ軍の正式採用銃のひとつであるスプリングフィールドM14の近代改修モデルだ。

「景明、昨日はあたしの戦姉妹を助けてくれてありがとね」

「ああ、それに関しての報告なんだが、昨日ライカが持つて帰つてきた銃、気づいてるかも知れないがイタリア製だ」

「報告書は読んだわよ、ちょっと妙ではあるわね」

「・・・どこのが妙なの?」

銃関連の話題に弱いつかさが尋ねた。

「ベレッタつてのはイタリアの銃器メーカーなんだがいろんな会社を取り込んで世界でも有数の大手銃器メーカーになった。そのベレッタ社が最近開発したアサルトライフルが昨日ライカが奪つてきたR×4ストームなんだが・・・」

「そう言えば、これまでのテロリスト連中って確かほとんどがロシア製の武器だつたよね」

「そうだ、それにあの銃はまだそれほど値段が安くないつてない、少なくともあれ一つでAKのデッドコピー一品なら三つは買えるはずだ」

「つまり、そこまで高性能な銃を買えると云つことは……」

「何か巨大な後ろ盾があつたりするのかもしれないつてことだ。確証はないんだがな」

そう言つて再び射撃に戻る景明。

「それと聞いたわよ、あなたの戦姉妹になりたいつて娘がいるつて話」

景明が珍しく口を外した。よほど気にしているらしい。

「へえ、矢崎君にも、そんな話があつたんだ」

不知火が面白そうに言つ。

「私もいるけど意外と楽しいわ。そうだ、その候補の娘つて確かあの娘と同じクラスだつたわ
ね・・・」

そんなことをつぶやきながらアリアが携帯を取り出してどこかにかけ始めていた。しばらくすると、

アリアの戦姉妹である間宮あかりが一人の少女を連れてくる。一人

は艶のある黒髪を侍ポニー・テールにした少女と、ダークブルーの髪をツインテールにして眼鏡をかけた少女だった。

「ありがとね。で、あかり、この一人がそうなの？」

「はい、そうですよ。こっちのポニー・テールの娘が北条小夜子ちゃんで、こっちのツインテールの娘が古河茜ちゃんです！」

紹介された二人がぺこりとお辞儀した。

「で、どっちがどっちだ？」

「わ、わたしが矢崎の戦男妹候補で」

「わたしが、服部先輩の戦姉妹候補です！」

小夜子と茜がそう言いきつた。

「ま、とりあえずどんな銃を使つてるか・・・だな」

景明が一人にそう言つと二人が背中に背負つていたケースから銃を取り出す。小夜子が使うのはベルギーFN社の新型アサルトライフル、SCAR-H。7.62mm弾を使用するタイプで既にオプションパーツは装備されている。腰のホルスターに納められているのはSIGザウエルP239シルバースライドという装備だ。茜の方は、FN SCARを狙撃用にしたモデルのSCAR-SLRと日本警察やSPでも使用されている小型のハンドガンSIG P232SLを取り出した。

「いい装備を使つてゐるな

「あ、ありがと、『アーヴィング』

景明に褒めてもらつたのが嬉しいのか顔を赤べかる小夜子。

「さて……つかせねばどうする？..」

「あたしさ」の娘とエルグランやつてへるよ~

「俺は……とつあえずアーヴィングにでも連れて行つてみる。セイでの成績次第つてとこりだらうつな」

「向のアーヴィングよ

アリアが尋ねてきた。

「昨日、救出作戦をやつたあの倉庫街の調査だ」

臨海部にある工業地区の一角を景明と小夜子を乗せたエルグラン
ドが走る。昨日の件に関しては武偵校も気になつていていたのだろう。
すぐにミッションの許可が下りた。

「それはそうと、何で俺なんかと戦男妹になんかなつとしたんだ
？」

「えつと……前に助けてもらつた……から、です」

「すまん、記憶にない

「舞浜区のウォルトランド警備の警備で私を助けてくれたことです
……覚えてませんか？」

「ああ、本当にすまないんだが……覚えてない」

「そう言つと残念そうに肩を落とす小夜子。

「本当にすまんな……つとそろそろだ。準備しとけよ」

「はい」

エルグランドが倉庫街に足を踏み入れた。エルグランドを隠して車を降りる、ケースから銃を取り出す。N4とSCAR-Hを構える。あかり達が遭遇した区画へと歩いていく。バンブキ解除鍵を使って倉庫の扉を開ける。暗い倉庫の中に一人の銃に装備されたライトの明かりのみが頼りだ。

「相変わらず木箱が多いな……何か見つけたか？」

「先輩……」れ、見てください」

そう言つて小夜子が景明を連れて行く、そこにあつたのは大量の銃器だつた。昨日見たベレッタR×4ではない、今回はFN F2 000が大量に納められていた。

「これは……」

銃を一つ手にとってみると製造番号が削り取られていた。

「おいおい……犯罪の匂いしかしないんだが……」

「でも……これだけの銃を日本に運び入れて何をしようとしてるんでしょう……だつて変じないです

か。アサルトライフルをこれだけ搬入して……戦争かテロでもおっぱじめよつとしているとしか……」

若干青ざめている小夜子。景明もそれは思つていた、普通、銃を密輸入するにしてもここまで大量には輸入しない、それこそ戦争でも起こそうとしている連中でもない限り……だ。

「先輩……私……怖いです……」

「……安心しる、それが普通の人間の感覚だ。とりあえず、増援を呼ぼう……」

そう言いかけたとき通りの外で車が止まる音がした。

「どうしたんですか？」

「まずい……隠れるぞ」

そう言つて、手近な物陰に隠れる一人、倉庫の前に止まつた車はかなり大きいトラックだろう、静かに伺つていると、倉庫のシャッターが開いて、屈強な男達が次々と銃の入つたケースを持って行く。

（あ、N4置いてきちまつた……）

そんなことを思つてゐると一人の男が景明のN4に気がついた、それを持つてシャッターの近くにいるリーダーらしき男の近くに持つて行く。ここからでは何を話してゐるのかは聞こえない。だが、捜索をしないところをみると昨日の戦闘で、あかり達が落としていつたものだらうということで話がまとまつたようだ。シャッターが閉まり始め、トラックが走り去つてから数分後、一人がようやく物

陰から姿を現した。

「何とかなつたな……」

「でも……銃は全部もつてつしゃいましたね」

「さうだな、任務は継続不可能、戻るぞ」

そう言つて倉庫から外に出る。倉庫街は来たときと変わらず恐ろしく静かだった。だが・・・その静かさが一人にはとてつもなく不安を感じさせた。エルグランドまで戻る。武偵高に戻る途中、景明が小夜子にカードキーを渡した。

「先輩、これは？」

「俺の部屋の鍵だ。好きなとき【アミカ】に使つていいぞ。これからお前は俺の戦男妹だよろしくな、小夜子」

「はい、よろしくお願いします。先輩！」

心の底から嬉しそうな笑顔で小夜子が笑つた。

第12・5話 景吾とつかさの戦姉妹育成日記（後書き）

戦姉妹契約完了ですね、この話はある意味2巻のプロローグ的な感じの話です。2巻の話がどんな話になるかはまだここでは明かせませんが、ちょっと戦闘が多めの話になりそうです。感想お待ちしております。それでは…！

第13話 重要参考人 矢崎景明（前書き）

新章開始！今日は白石様の『防人の45口径』からタ力が登場します！！

5月13日 東京都内 23:45

一人の男・・・といつより少年が道を歩いている、通りはだいぶまばらになつてきだが、サラリーマンやOL、駅前にはキャバクラの客引きの店員が立つて、道を彼は歩いていく。その少年がこの街にとけ込んでいるのはそのあまりに大人びた雰囲気と服装のせいだった。シャツまで真っ黒なダークスーツの上に、大型の真っ黒な軍用ロングコート、特殊部隊のブーツを製造しているメーカーにオーダーしてもらつた特注品の軍用ロングブーツを履いて米軍でも使われている大型のショルダーバッグを担いでいる。通りの向こうには警察官と東京武偵局の職員が検問を敷いている。少年は地図を取り出してその場所にX印を書き込むと再び歩き始めた。近くに駐めてある車に戻つてトランクを開ける。ショルダーバッグを二重底にかくして車に戻つた。コートを脱いで仕事帰りのサラリーマンらしく、ピン底眼鏡を掛けてから車を発進させる。警察官が質問してきた。

「IJの少年を知りませんか?」

「いえ・・・こいつ、何をやらかしたんです?」

「先日の長官暗殺未遂事件の犯人ですよ。それではどうぞ、行ってください」

警官がGOサインを出すと同時に車が走り始めた。再びコートを羽織つて眼鏡を助手席に放り投げる。バックミラーを見て追跡して

くる者がいなかを確かめると、少年・・・矢崎景明は大きく息をついた。

「やれやれ、面倒なことになつた」

5月3日 武偵高 強襲科 屋外射撃場

あの台風の夜に起きた『武偵殺し』の事件以降、武偵高では穏やかな日々が続いていた。現在、景明は強襲科のレーンで射撃を行つている最中だつた。

「よひ、景明、練習か?」

そう声をかけてきたのは同じ2年A組の同級生、鷹山勇治だつた。こいつも一般生徒と同じように振る舞つているが、裏の顔は陸上自衛隊の最精銳とも言われる特殊作戦部の一員で何度も秘密裏に海外に派遣されている。第二次朝鮮戦争では北朝鮮本国から脱出するTF141の援護に当たつた。その縁で未だに親交が続いている。

「そういうやタカ、この前89式お釈迦にしたんだって?後輩から聞いたぞ。何でも物理法則を無視した壊れ方したそうじやねーか」

「一体何が起きたらそんな伝わり方をするんだ?まあ・・・大体あつてるけど」

「それはそうと、次に使う奴は決めてるのか?」

「まあ、やうだな・・・M4でも使おうかな・・・」

やうタカがつぶやくと、景明がケースから銃を取り出した。

「それなんかどうだ?」

「・・・これ、89式にRAS装備した奴だろ、俺もまだそいつ使つたことないんだぞ」

やう言いつつも、景明から89式を受け取って射撃を開始するタ力。

「やういや、景明。N4はどうしたんだ?」

「あーーアレか。この前奪われてな・・・」

「例の倉庫街のやうか。確かにあれだけの銃が密輸入されたってのに足跡が見つからぬんだよ
な・・・警察も血眼になつて搜してるらしいぜ。そろそろ自衛隊にも仕事が回つてくるかもな」

89式を撃ちつつ、そんな笑えないジョークを飛ばすタカ。

「国内の治安維持に特戦群出してくるようじやこの国も終わりだろ」

「ま、それもそうだな」

しばらく冷静に射撃を続ける一人。数十分ほど撃つてから近くのベンチに腰を下ろした。

「どうだ、結構いけるだろ」

「まあ、もうちょっと考えてみるわ」

そう言つてスポーツドリンクの入つたペットボトルを開けるタカ。

「わついや、今日景明が使つてた銃つてSR-25か?」

「いや、AR-10を徹底的にカスタムした。つい最近平賀から帰つてきたんだが・・・結構金が掛かったな、十・・・いや、十五万くらいか」

「結構金を積んだな・・・」

「これはある意味、思い出の品つてやつだからな・・・気合いも入るわ」

そう言つて笑う景明。AR-10とはコージン・ストナーが開発した銃の一つで正式名称はアーマーライトAR-10、後のM16の前身で、アルミニウムとプラスチックを多用した革新的なデザインで軽量化に成功している。景明が持つているのはその中でも民間用に連射機構を省いたモデル。現在でも使用は続いており、近代化改修を施したAR-10 SUPER SASや、AR-10をベースに7.62mmNATO弾を使用するルイス・マシン&トウル社製のLM308MWSなどが存在している。景明の使用するAR-10は16インチRASに固定式ストック、バイポッドとスコープを装備しているほか、ストックにはM24などに装備されるバットストックアモーチというものが装備されていた。そのポーチの外側にあるカートキアリアには5発の弾丸が装備されている、装備しているのは武偵弾の一つ、徹甲弾。対超偵用の装備だ。

「そういうや、最近『魔剣』が日本に入国したって話だろ・・・まだ休めるのは先になりそうだな」

疲れ気味に景明がぼやいた。

「確かに明日は・・・げえ、警視庁と合同の護衛任務だ」

「誰か来るのか？」

「警察のお偉いさんだろ、誰かは知らないが・・・な」

PDAを見た景明が再びぼやいた。PDAを畳んでサイドポーチに戻してAR-10をキャリー用ケースに収納した。そのまま装備科のロッカーへと収納する。腰のホルスターに収納してあつたゴールドコンバット?もロッカーに収める。

「んじゃ、明日は早いからな・・・先に帰るわ。奥様によろしくな」

「おー、じゃあなー」

武偵高の鞄を担いで射撃場の外に出る、時間はいつの間にか午後3時を過ぎていた。景明はゆっくりとバス停に向かって歩き出す。

武偵高からそつ遠くない台場で警察長官による宣言があるという。それの護衛に武偵を使うのはいかがなものかと思つが、一応給料分

翌日 8:45 台場

の仕事はすることにした。彼の服も武偵高の制服ではなく、私服のダークスースにロングコートといづ出で立ちだ。お陰で私服警官の中にいても誰も質問してこない。景明の担当する場所は長官が演説する地点から数百メートルほど離れた場所だつた。既に数人の私服警官やS A Tが待機している。今日の彼の武装はSIGザウエルP220Rだけだつた。本来ならばアサルトライフルくらい持つていきたいところだが許可が下りなかつた。この部屋にいるS A Tは重装備で89式小銃を持つていた。

(S A Tで89式の配備が進んでるつてのは本当だつたんだな・・・)

そんなことを考えながら窓の外をのぞく、この部屋に詰めている刑事達は全く口を開かない。

(・・・みんながみんな口下手つてわけでもなさそつだな。何を待つてる?)

そんなことを頭の片隅で考えていると・・・演壇に立つている警察長官が撃たれた。狙撃だと思った

瞬間、後ろで銃を構える音がした。私服警官達が一斉に銃を抜いたのだ。

(相手は3人+S A Tが2人・・・圧倒的に分が悪い、さてどうしたものか・・・)

そんなことを考えていると私服警官達が動いた。景明が迷わず一番近くにいた警官にP220Rの弾丸を撃つそれと同時に窓を突き破つて外に出た。幸いなことに階が低かったことと落ちた場所がゴミ捨て場だったことでそれほど怪我は負わなかつた。近くに路上駐

車していた乗用車のドアのガラスをグリップで割る。鍵が刺さっていなかつたので解除^{パンプキ}鍵でエンジンをかける。車を走らせながら景明は次に何をするかを考えていた。

（さ～て、恐ろしく面倒なことに巻き込まれたんじゃないだろうな。
・・）

武眞高 9:51 2年A組教室

2年A組の教室では1時間目授業が終わり穏やかな休憩時間にはいつていた。武藤は机に突っ伏して寝ているし、アリアはキンジと大声で言い争いをしている。つかさも何気なく携帯のフリップを開けた瞬間クラス全員に武眞高の周知メールが来た。クラス中の生徒が携帯を開く。と同時につかさが倒れた。

「つかさ！？ ちょっとどうしたの！？ つかさ！？」

「おい、服部！ 大丈夫か！？ 武藤、保健室まではこぶの手伝ってくれ！」

「お、おついー！」

慌ただしくA組の生徒達が動き始める。机の上にあつたつかさの携帯に表示されたメールの内容はこんな内容だった。

『本日午前8時45分、台場で警視庁長官が狙撃、現在、警視庁、警察庁、東京武眞局は重要な参考人として東京武眞高2年A組矢崎景明の身柄を捜索中。続報は順次連絡する』

第13話 重要参考人 矢崎景明（後書き）

予想の斜め上を行く始まり方で始まつた第2章、ある映画の冒頭がモデルになつています。原作では2巻が始まる少し前の話ですね。では、感想お待ちしております。それでは！！

第1-4話 反撃の狼煙（前書き）

今回CODからついにあの人が登場！他にもタカの戦男妹、風蓮
希が登場します！！

第14話 反撃の狼煙

五月四日 米軍横田基地 16:25

関東にある在日米軍の基地である横田基地に一機の輸送機が着陸しようとしていた。輸送機の発着自体珍しいことではないが、珍しかつたのはその輸送機がイギリス空軍所属のものだったからだ。つい先日、ホームズ家令嬢をイギリスに送るため一機のC-17がこの基地に待機していたが結局令嬢は日本に残ることとなり、その輸送機は遠路はるばるイギリスへと戻る羽目になった。それから日を置かず、またイギリス空軍の輸送機がやってきたとあっては何事かと疑わざるを得ないだろう。C-17の後部カーゴドアが開いて物資と共に一人の男が降りてきた。口元には黒い髪が伸び放題になっている。それを気にすることなく男は基地にあつたハンヴィーに乗り込んで基地を出て行った。男が向かった先は新宿にある東京拘置所、面会の予約は事前に入れてあるのですんなり通ることが出来た。面会室には既に女性が座つて待機していた。

「面会時間は三十分です」

女性警官が男に一礼して去つていいく。

「髪は剃らないんですね」

「剃つたら誰か分からなくなってしまいますから、Mrs.神崎」

「お久しぶりですね、プライス大尉」

神崎アリアの母親である神崎かなえが目の前に座つている男、T F-14の指揮官でもあるジョン・プライスにそう言った。

東京都内 17:55

廃工場には数人のスー^ツ姿の男達が転がっている。全員が一様に防弾チョッキを着て、手にはハンドガン・・・制服警官が持つているようなりボルバーではなく、最近警察でも配備が始まつたSIGザウエルP226、P230JやS&Wレディ・イーグルを持つている。

「警視庁特殊強行遊撃班・・・聞いたことのない部署だな」

その中央に立つている黒い男・・・矢崎景明はそうつぶやいて手帳を床に投げ捨てた。逃走を開始してから早数日、銃や弾丸の方は暴力団事務所を襲つてその都度調達しているが、さすがにハンドガン数挺だけで逃げ回るには限度がある、

東京都内各地に専用のセーフハウスを持つている景明はセーフハウスに数日分の食料と武器弾薬が常備されている。そこに行くためには脚がいるので探していい最中だつたのだが、その仕事の最中に彼らに襲われ今し方全員沈めたばかりだ。なかなかに装備が上等だつたので貰えるだけもらつていく。と、外に車が止まる音と、人間の足音が聞こえてきた。咄嗟に近くの廃材の陰に身を隠す。廃工場に入ってきたのは武慎高の生徒だつた。全員がC装備で手にはM4A1やM16A4を持っている。

(どこから誰かがタレ込んだ・・・か、やれない数じゃないな)

景明はすぐに判断すると物陰から姿を動かした。

希 side

タ力の戦男女である、風連希。強襲科の生徒にして同じ強襲科のあかりやライカ、景明の戦男女である小夜子とも仲がよかつた。現

在彼らに与えられた任務は矢崎景明の確保だった。本来、普通の犯罪者を捕まえにいくのにこの装備は使わない。だが、今回は教務科からこの装備の装着は必須とされ武器も学校に保管されているARを持たされた。つまり、それだけ景明が危険だということだ。おまけに自分達の人数は20人、控えめな人数とはいえ少なくとも銃を持った犯罪者相手にこの数はおかしい。だが何度か彼の講習を受けていた希自身は心のどこかで疑問視していた。

(この装備と人数で勝てるかな・・・?)

この任務に抜擢された一年の殆どは二年である景明を倒して名をあげようとしているが、そう簡単にあの先輩が倒されるわけがない、武僧高の中でも群を抜いて危険にして過激、解決手段が銃と銃弾といわれてしまうほど、彼の攻撃は容赦がない。何せ、通常の暴徒鎮圧に対して軽機関銃を担いでくるほどだ、最近は相方である服部先輩の影響か更に過激になつたような気がする。台風一号が来た夜、アリアやキンジの功績で埋もれてしまつてはいるが羽田空港の航空機整備場に大手軍事企業の息子をさらつたインチキ宗教団体50人以上をたつた一人で壊滅させたといつ。希自身、後日戦男妹であるタ力にそのことを尋ねてみたがそれは誇張でもなんでもなく本当にたつた一人で50人以上いた武装集団を壊滅させてしまつたという。そんな人物相手に勝とうなど夢想家もいいところだ、と希は思う。それに・・・

(私は先輩が容疑者なんてどうしても信じられないんだよね・・・)

いくら学内の評価が危ない人だつたとしても希の戦男妹でもあるタ力やキンジ達と話している姿、校内でつかさといる姿、小夜子に戦闘のイロハを教えている姿・・・そのどれをとっても今回の事件に関する線が見えてこない。そういうしているうちにチームリーダ

ーの少年が20人グループを5人班4つに分けて工場内の搜索を開始し始めた。

「それにしてもいいタイミングでの先輩事件起こしてくれたよな」

「そうそう、俺前からあの先輩なんかやらかすだろーっておもつてたけど、ほんとにやらかしちゃうんだもんな、笑えてくるぜー」

希が入っている第3グループのリーダーと副リーダーが笑いながら工場内を搜索している。

「俺はやらかしちゃいないんだけどな」

そんなことが聞こえた瞬間、先頭を歩く男子が倒れた。黒い影が見えたかと思うと他の男子も次々と倒れていく。

「全く……盗つてくれと言わんばかりの豪華な装備だな」

M16A4を拾い上げながらさうつづぶやく景明。ガタガタ震えている希に声を掛ける。

「おお、タ力のところの、元気にしてるか?」

「あ、はい、してます」

「そつかそつかそれはそれで何より……といつひとでちゅうと眠つてもらうつづ」

次の瞬間景明の姿が消えた。背後に回られたと思った瞬間彼女の

意識は闇の中へと落ちていった。

数分後、突入してきた一年生達の意識を全員綺麗に刈り取つてから、景明は廃工場の外に出た。外では武偵高の生徒達を載せてきたバンが停められている。近くにあつた一台のドアをノック、運転手が出てきたところで再び意識を刈り取つて、車の外に引きずり出す。ポケットを探つて車のキーとナンバーを取り出して、盗難車追跡システムのコードを解除。鮮やかな手つきで作業を進めていく。作業が完了するとバンは静かに走り出した。

東京武偵高 2年A組

アドシアードの準備が始まる中、つかさは心ここに有らざと言つた雰囲気で外を眺めていた。それを眺めながらタカ、キンジ、武藤、アリア、そしてタ力の未来嫁である蓼光稀の姿もあつた。

「……最近ずっとあんな感じだぜ……」

武藤が心配そうにつかさを見ているが今田ここに集まつたのは單に彼女の心配をするためではない。五人が囲む机の上には一枚の写真と事件があつた日の事件現場の地図があつた。画像はそれほど鮮明ではないが部屋の中で89式を構えるS A T隊員と私服警官の姿がある。景明^{レザード}が落下する直前、P D Aで撮つた写真だ。この出所から探らうと諜報科や情報科^{インフォルマ}が躍起になつているが特定は不可能だろうと五人は思つていた、素性を知つてゐるアリアやタ力ともかくキンジや武藤、光稀も普段の彼を知つてゐるので彼がこういったヘマをしないことも重々知つていた。だから彼が位置の特定をされるかもしれないというリスクを冒してまで送つてきたこの写真には何か

意味があるとこの五人は考えていた。

「じゃあ、光稀、ここには誰一人としてS A T隊員を置いていないんだな？」

「うん、それに第一、矢崎くんが来ているなら真っ先に私のところに連絡が来るはずだもの、第一あの日、私がS A Tに許可したのはこっちだよ」

タ力の確認するような口調、それに続いて光稀が一枚の写真を指さした。写真はドイツ、H & K社が生み出した傑作短機関銃M P 5、しかもフルオート機構を外したF Kというモデルだつた。光稀はS A Tの一隊員であると同時にS A Tの作戦指揮も担つてゐる。当然事件があつたあの日も配置の指揮を執つてゐたはずなのでこつして聞いているというわけだ。だが光稀はS A T隊員の武装は短機関銃であるM P 5 F KとS I GザウエルP 226以外の武装を認めていなかつた上にあの現場に景明がきていたことさえ知らなかつたといふ。ということはこの写真、明らかにおかしいのだ。本来配置していなかつた場所にS A Tが現れ、武装も許可していない89式を携行しているとなれば、じゃあこいつらは一体誰だという結論にたどり着く。

「アタシとバカキンジは白雪の護衛で忙しいから参加できない」として・・・どうする？願に頼んでFコニットでも動かしてもらひ？

「流石にそれは過激すぎるだろ？・・・あれを動かすと言つ」とは戦争が始まったと同義だからな・・・特殊戦群動かす方がまだマシかもしねない、でもなあ・・・」

アリアが出した意見にタ力が否定する。このクラスに所属するチ

一ト魔神こと萩原願率いるFユニットを動かすとなれば防衛大臣の首がすぐ変わることは必至だ。つい最近武偵殺しで、F-15J撃墜の責任をとつて防衛大臣が辞職したばかりなのだ。これ以上日本国内でドンパチをやらかしたら間違いなく国民感情は悪化の一途を辿る。それならば動かし辛いとはいえた力の所属する特戦群を動かした方がいい。だが相手は一人とはいえ世界最強の座を守り続いている特殊部隊TF141の隊員だ、遅れば取らないだろうが、彼の場合、特戦群とはぐぐり抜けてきた修羅場の質が違う。かといって一般警察や武偵高の生徒に頼るようでは被害は拡大する一方だ。ついさっき、景明を追撃していた一年生が全滅した。20人全員がもとの見事に意識を刈り取られていたという。タカが担架に載せられて救護科の生徒に運ばれていく20人を見送る。

「そのうち蘭豹からお達しがくるだろうからそれまで独自に調査を進めるつてことでいいな？」

キンジが綺麗に場を納めた。五人がそれぞれ別の方へと駆け出していく。アリアがつかさに心配そうな視線を送つてから教室を後にした。

都内某所 景明のセーフハウス

暗い室内ではこの家の主である景明が大量の武器を机の上に出していた。ハンドガン、SMG、アサルトライフル、スナイパーライフル、LMG、使い捨て対戦車兵器、アンチマテリアルライフル、手榴弾、スマート、フラッシュユバン、C4、投げナイフ、コンバットナイフ、ククリブレード、日本刀、そして大量の機材や弾薬がセットされていく。一人で充分戦争が出来そうなレベルだ。ハンドガンをサイドホールスターに、ナイフや爆発物関連はコードのポケットに仕舞う。そのほかの大型の銃器関連は車に積み込んでいく。ここ

まで乗ってきたバンは、今し方爆発処理したところだ。今までは逃亡するだけで反撃に転じることは出来なかつた。だが、敵のおよその姿は見えてきた。

「セーーー、反撃開始だ。待つてろよクソ共、今から行つてボコボコにしてやる」

景明がどこかの死ぬほど頑張るハゲでマッヂョな警衛のように不敵な笑みを浮かべた。

第1-4話 反撃の狼煙（後書き）

さて、反撃開始です！！

第15話 激闘（前書き）

あかり VS 景明！！

5月9日 東京都臨海区 ウォルトランド周辺 19:56

夢の国として有名な東京ウォルトランドの近くにある本来ならばアトラクションの機材が納められている場所では今、銃撃戦の真つ只中だった。数十人の雇われヤクザやチンピラ達が相手しているのはたつた一人の少年だった。ヤクザやチンピラの持つ銃はベレッタRX4ストーム、彼らが持つにしては新しすぎる銃だった。だが大した疑問を抱くことなく薬でラリつている彼らは目の前の少年に対して銃を撃ちまくる。だが、相手は単なる武偵ではなかつた。少年の名前は矢崎景明、現役特殊部隊の隊員でもある。だから、彼は迷うことなく撃つ。薬でハイになつてているバカ共の顔面に銃弾を叩き込んでいく。明日になればニュースのレポーターが『近年稀に見る悪党』などと言つてもてはやすだらうが、そんなことを気にしている余地はない。

つい先日無実の罪で警察と東京武偵局のメンバーに追いかけられることになつた景明だが、現在は反撃に転じていた。今日の夜ここに何がが運び込まれる予定だつたというが彼が来てみると既に荷物は運び出された後、居たのは捨て駒としか思えないような三下連中だけだつた。また、チーマーの眉間に穴が開く。景明が今使つているのは、レミントン社製スナイパー・ライフル、R S A S S。余り売れているとは言い難いがなかなかに性能がいいので彼は気に入つてゐる。

狙撃用のスコープにサイドレールは近・中距離戦用のマイクロドットサイト、サウンドサプレッサーにバイポッドとスリングを装備している。プラスチック製マガジンには7.62mm弾が20発、相手の頭を撃ちぬくには十分な威力と貫通力を持つている。あらかた叩き潰したところでR S A S Sを後ろにまわしてサイドホルスター

ーからH&K社のハンドガンU.S.P.45を抜く。既に銃にはレーザー サイトとタクティカルライトが装備されていた。工場内を搜索して何か手がかりになりそうな物を探す。数十分かけて探したが結局見つからなかつたので撤収することにした。

「さて……次の目的地は……」

車に戻る途中、彼は新しい目的地を探す。

東京都内 ホテル

東京各地にある外国人向けのホテルの一室には神崎かなえと面会を済ませたプライスの姿もあつた。現在は室内にある固定電話でソープと連絡を取り合つている。

「『魔剣』の行方は……カンボジアで途絶えたのか」

『そうだプライス、だが予想では日本に向かつてゐるはずだ。そつちにはジョーカーが居るだろ?』

「あー、そのジョーカーなんだが、今警察に追いかけられてるらしい、ニュースでやつてる」

『何やつたんだあいつ』

「それを俺に聞くな。情報がこつちに来たらまた連絡する

『了解だ』

そう言つてソープとの電話は切れた。

「あいつもあいつで大変だな」

プライスがそうつぶやいて旅行用鞄から愛銃であるコルトM1911を取り出した。旅行用鞄とは別に銃を積んできた鞄からもH&K製のサブマシンガンUMPを取り出す。既にホログラフィックサイト、フォアグリップ、レーザーサイトが装備されている。

「さて・・・始めるか」

プライスがそう言って SMP を仕舞う。鞄を持つて彼は夜の東京へと踏み出した。

東京武偵高 グラウンド

景明の捕縛のために向かわせた一年生の被害は日に日に増大していった。そして今日再編成が終わつた1年生が出撃しようとしていた。全員がC装備で使用する銃はH&KG36C、ドイツ連邦軍で採用されていアサルトライフルだ。捕縛隊の中にはアリアの戦姉妹であるあかり、その友人のライカ、そして先日の作戦にも参加した希の姿もある。小夜子は参加拒否、茜はつかさと共にいるのでここにはいなかつた。車両科の大型トラックが3台、そして改造したBMWに護衛されてトラックは武偵高を出た。それをアリアは屋上から一人で監視していた。現在キンジは白雪の護衛に就いているため不在、武藤も車両科の免許取得のためにここにはいなかつた。

「やで……やでこるんでしょ、のぞきは感心しないわよ、つかせ」

「うわわわわー、やつぱりばれりやつたか」

屋上にある貯水タンクの裏からつかさが姿を現した。現在彼女はアリアと共に白雪の護衛に就いている。

「ホント、自分のパートナーが危機的状況だってのに随分気楽ね」

「そう簡単に景明はやられなって信じてるからかな。だってわ・た・しのパートナーだよ？ 1年やそこらの武僧が掛かつて勝てるわけないじゃない……知り合いでのチート連中に比べれば少しほは見劣りするけど」

「それはそうだけどね……ま、いいわ、キンジの護衛の方はどうなつてるの？」

「白雪を説き伏せて部屋の周辺にはセントリーガンを配置、キンジくんの部屋には至る所に法儀礼済みのクレイモアを設置、それと、景明のコネを使ってアメリカ空軍から無人攻撃機MQ-9リーパーを2機ほど借りてるよ。これくらいで大丈夫でしょ？」

「……さすがは過激派の相棒ね、やることが豪華すぎるわよ、っていうカリーパーなんてよく借りれたわね……でもこれくらいが丁度いいのかもね」

アリアが若干げつそりしているが納得したらしく。

「うつかり起爆装置を押さないよう[設]定はしてあるはずだから大丈夫だとは思うけどね。それと、今し方レキと『鷹の爪』を交代してきたよ」

鷹の田とはスナイパーの仕事を指すスラングの一つで銃を使って対象の監視をするのが仕事だ。狙撃科では初心者向けの仕事だが、つかさ自身も景明と共に何度か『鷹の田』をしたことがある。

「ちなみに使つてる銃は？」

「チヨイタックM200、景明の部屋にあつたやつを小夜ちゃん経由で借りた、今はいなけれど小夜ちゃんもさつきまで手伝ってくれたよ」

「ホントあいつ装備が豪華ね……アタシも借りてこようかじり。あいつの戦姉妹の電番持つてる?」

「あるよー」

つかさがコートのポケットからスマートフォンを取り出して赤外線通信を行つ。

「こっちも何とかしないとね、景明のこと何とかしないと

「それに関してはタカくんが動くみたいだよ?」

「TF141隊員と特戦群のHースが激突か……見てみたいわね」

アリアが屋上から眼下の光景を眺めつつ静かにそつ言つた。

路肩から転げ落ちたバンが燃え上がつている。外には車内に乗つていた1年生達が応急手当を受けていた。応急手当を行つたのは景明出て当てを終えるとすぐにその場を離れた。トラックに乗つてい

た数人の生徒達はG36Cを構えて接近していた。M249パラトルーパー モデルにボックスマガジンを装備する。

「本当に憲りない連中だ」

それと同時に隠れていた場所から上半身を出して舐めるように射撃を浴びせる。数人が痛みで倒れた、何人かがこっちに向けて撃つてきたのでスタンディングレネードを投げつける。数分後光と甲高い音が響いて数人が視界と聴覚を奪われる、そこを逃さずにM249で射撃、動きを止めた。

別方向から接近していた3人に對しては腰のホルスターにあつたP232を抜いて一人一発ずつきつちりお見舞いする。遮蔽物を変えて再び射撃、的確に人数を減らしていく。LMGを中心にハンドガンや爆発物も使つた戦いを繰り広げる。M249の弾薬が無くなつた。スリングで後ろに回してからステアーアAUGを手に持つた。オーストリア軍で採用されたフルバップ式のライフルであちこちにマウントレールを装備している。的確に弾丸を撃ち込みながら更に位置を変えていく。

既にトラック二つ分の1年生を潰したので残るはあと少し。そこで物陰から希が出てきた。持つてるのはG36C、彼女が撃つよりも早く景明は投げナイフを投げつけた。希は景明が撃つてくるものだと思っていたので咄嗟のことに反応できない。ナイフに気を取られている隙にハンドガンで希を静かにさせた。その背後からG36Cを捨ててマイクロウージーをもつたあかりとナイフを持つたライカが距離を詰めてきた。

「先輩、お願ひですからおとなしく捕まつてください……！」

「だが断る……」

ライカの腕を蹴り上げてナイフをはねとばす間髪いれずにライカがもう一本のナイフを抜いた。景明も腰の後ろから両手にククリブレードを持つ。ライカが内懷にはいるべく一気に距離を詰めた。ナイフの機動を見切つて肘を顔面に叩き込む訓練のときのように手加減は一切無し本気の特殊部隊員の一撃がライカに直撃した。鼻の骨が折れないように手加減したのだが、その影響でライカはナイフを取り落としてしまう。そこで景明が気を失わせた。そこにあかりが飛び込んできた。双方の動きが止まる。

「…………聞宮、お前があれだけ射撃が下手なのには理由があるだろ」

「理由なんてありません、単に下手なだけです」

「それだったら…………ビリじたらい。お友達を撃つたら本気を出してくれるか？」

「…………武偵は任務中に人を殺してはならない…………9条にもそうあるじゃないですか！」

「それはどうかな、さあ聞宮、お前の力を見せてみろ、大切な友人を守るために、大切な戦姉妹であるアリアを守るために、隠されたお前の本当の力を見せてみろ！…」

悪役のような台詞と共に景明がP232を抜いた。それと同時にあかりの纏う雰囲気が今までとは違うものへと変貌する。あかりがマイクロウージーを上げた。いつもおどおどしているときとは桁違いの速度でマイクロウージーの狙いをつける。それと同時にあかりがいつものようにフルオートではなく2・3発に区切った短連射を行つた。狙いは殆どが景明の頭部！

（やつぱりか！…）

迫り来る弾丸を避けて景明が反撃開始、ステアーを片手で撃つて相手を牽制しつつ、ククリブレードを振るう。あかりがそれを避けてひらりと宙返り、降りた場所には気を失った1年生が一人。その二人が持っていたG36Cのストックを折りたたんでアサルトライフル一挺撃ち、凄まじい勢いで遮蔽物に穴が開き始める。手榴弾をアンダースローで投げつけるとあかりは正確に一つを撃ち抜いた。精密機械の如き戦闘能力。

「やつぱりか、見直したぞ間宮……！」

「こんな力……認めたくなんかない……！」

G36Cの弾丸が尽きると同時に次のG36の落ちている場所へと移動する。景明が前へと飛びだした。あかりの放つG36Cの弾丸を避けながら腰に装備されていた手榴弾を投げる、アンダースローではなく野球選手のような剛速球で投げつけたあかりが手榴弾を迎撃すると同時に煙が周囲に広がった、煙幕手榴弾だと気付いたときにはもう遅い、一度煙幕手榴弾の範囲外に脱出した。その後、右手にP226左手にP232を持った景明が走ってきた。鳶穿ちで景明の銃をもぎ取りに掛かる。だが、その動きに入る直前で景明が両手の銃を捨ててあかりに掌底打を打ち込んだ。あかりの動きが止まる。立て続けに打撃技を叩き込んで動きを止める。ふらふらになつたところで脚を払つて地面に転がした。あかりも体力を使い果たしたのか転がされても抵抗していない。

「済まんな、間宮

「……先輩、私……強かつたですか？」

「ああ、俺もびっくりだ。それと……9条破りは何もお前だけじゃ

ない。かくいう俺も9条破りなのぞ」

「それは……どういづ……？」

「詳しく述べ帰つてお前と同じくらいの背丈のお姉さんに聞いてみる。丁寧に教えてくれるはずだ。それと……ウチの戦兄妹とも仲良くなってくれ。よろしくな」

「はい、お願ひしますね、先輩……」

それと同時に景明があかりの意識を刈り取った。この日景明は新たな伝説を打ち立てる。1年生といえど強襲科の生徒50人と渡り合つてたつた一人で勝利したという伝説を。

そんなことはいざ知らず景明は新しいマガジンをステアーに差して、その場を後にした。

都内某所

プライスがUMPのライトをつけたまま工場内を歩いていく。少し気になつた車を追いかけてこの場所に辿り着いたときいきなり彼は襲われた。だがTF141の裏ボスでもある彼が後れを取るはずもなく、文字通り返り討ちにした。襲撃してきたのは5人、その内3人はUMPで頭を撃ち抜かれた状態で倒れている。もう一人は自白させる途中にショック死、最後の一人も出血多量で死んだ。別段、罪悪感は感じないこの業界は殺し殺され血で血を洗う業界なのだ。いちいち罪悪感を感じてゐる暇もない。そのまま工場内にはいると更に一人の襲撃を受けたので頸骨をへし折つてその場に転がしている。

「しかしこいつらは自衛隊……だよなあ。へたすりや国際問題にも

「発展するかもな」

「ではそう言いつつも彼はそうは思っていない。ここに転がっている死体の内5人は警察S A TのO Bだった。そして残りの二人のポケットを探つて何か身分を示す物を探す。捜し物はすぐに見つかつた。名前の中下に所属している基地と配属部署が書かれていた。

「科学防護隊……？バイオテロ対策がメインの連中が何でこんなところにいるんだ？」

プライスの疑問に応えるものではなく。外にはただ闇が広がつていた。

武慎高 19:23

装備科から一人の少年が出てくる。武慎高の制服の上にはタクティカルベストとファーの付いたダークブルーの防弾コートを着ている。彼女であり未来嫁でもある美稀からの贈り物だ。大規模麻薬売買組織ブラックイーグルに囚われ、救出された戦いの後に武慎高の屋上に呼び出されて彼女から直に手渡されたコートだった。

縫つたときに針で刺してしまった傷だらけの手を隠そうとして、もちろんそんなことはすぐにばれてしまつたが、彼女の思いと願いと愛情がつまつたこのコートを彼は生涯大事にすると未来嫁に誓つた。それを着ると言つことはそれだけ重要な戦いが彼を待ち受けているということでもあつた。

友人にして同業者、自分の救出作戦の折にはたつた一人で60人以上はいた元軍人、元傭兵で構成されたブラックイーグルの私兵軍団を全滅に追い込んだ彼を止めるためにタカこと鷹山勇治は行く。車には既にM16A4と愛用のキンバーカスタム、そしてある人物の形見でもある銃を持つて彼は行く。これ以上被害が広がる前に友

人を・・・矢崎景明を止めるために。携帯がメールを受信した。今頃は女子寮の自分の部屋で彼の帰りを誰よりも心待ちにしている末来嫁こと蓼美稀からだ。

『早く帰ってきてね』

なんてことはない文章、顔文字も何もないシンプルな文面からタ力は彼女の思いを受け取った。

「ほんと、俺にはもつたないくらいの良い嫁さんを持ったなあ」

そう言つて彼は車に乗り込んだ。向かう場所はあらかじめこじらから指定してある。

車は静かに走り出した。

都内某所 21:11

眼下には都内の夜景が広がっている。夕力から電話が掛かってきたときは驚いたものだが考えは自分を連れ出すためだらうと彼は思つた。義理堅いヤツだ。だからこそあの末来嫁は彼にべた惚れなのだろう。会合場所の近くに車が止まつた。どうやら相手も着いたらしい。

景明はRSSASSのボルトを引いた。

「さて、戦争するか」

第15話 激闘（後書き）

景明VSあかりは景明の勝ちですかね。結構やばかっただですが・。
・。さて次回はいよいよタカVS景明のガチの戦闘ですので。どうぞお楽しみに。

第16話 風雲急（前書き）

景明ＶＳタ力、戦闘開始！！

第16話 風雲急

武偵高周辺 倉庫街 1：21

プライスがUMPを構えて闇の倉庫街を歩いていく。ここにあるのは基本的に武偵高で使用する道具ばかりで彼にとつては関係のない物ばかりだつたが、そこでプライスは気になる物を見つけた。それはなんてことはないハンドガンだつたのだがハンドガンは凍つていた。今は5月それにここは日本だ。この時期に氷なんてある方がおかしい。だが、プライスがあることに至つた際、彼の真後ろから氷柱が飛んできた。それに気付いたプライスがすぐに反応する。近くにあつた棚の陰に身を隠すと声が聞こえてきた。

「プライスか、久しぶりだな！」

「そつちこそ久しぶりだな！聖なる小娘！」ジャヌス・デ・アーヴ

「TF141の裏ボスである貴様がここまで出張つてくるとはな！」

そう言いながら更に氷柱を飛ばしてくるジャンヌ。かつて英國と仏蘭西の間に起きた百年戦争を仏蘭西の勝利に導いたが、英國に掴まつて火刑にかけられた聖女ことジャンヌ・ダルク。それが彼女の正体だ。プライスが物陰からUMPを撃つ。消音器の抑制された銃声が響いてジャンヌが避けた。弾丸が棚に当たつて火花を散らす。

「あいにく俺はイギリス人なんだな！－フランスとは折り合いが悪いんだよ！－」

「私もだ！前にフィッシュ・アンド・チップスを食べたがあれは食えた

物ではない！！」

「それは同感だがなーーー！」

氷柱と銃弾の応酬が続く。だがジャンヌは無尽蔵に氷柱を撃つてくるのに対しプライスの方は銃なので必ず弾丸が切れる。移動しながらマガジンチェンジ、片手でUMPを撃つてジャンヌを牽制する。氷柱が何度も顔を掠めたが何とかやり過ごす。

「俺達の追跡を振り切つて日本まで来た理由は何だーーー！」

「なに、巫女を攫いに来ただけだ！」

氷柱が遂にUMPに直撃した、機関部を貫通しているため、この状態で撃つと何があるか分からぬ。UMPを捨ててガバメントを取り出す。

「少し喋りすぎたようだ、ではな裏ボスーーー！」

その言葉と共に倉庫からジャンヌの気配が消える。プライスも銃をホルスターに納めた。

「やれやれ、逃げられたか。ジョーカーを頼るつにものこの状況じゃキツイだらうし、帰るか……」

そう言つてプライスは倉庫街を後にした。

都内某所 22:21

銃弾が空気を切り裂く音が闇夜に響く。現在夕方は景明と会談す

るために指定していた場所にやつってきたのだが、車から出た瞬間、狙撃が襲ってきてM16A4が使い物にならなくなつた。先にこちらの武器を奪うという作戦に出たのだろう。M16は車の中に放り込んである。また平賀文にぼつたくられそうだがそれもここから生きて帰つてからの話だ。

確かに強襲科は明日なき学科といわれている。何せ訓練にせよ実戦にせよ、毎年平均で数人が任務の遂行中や訓練中に死亡している。今回の任務だつてそうだ。相手は武偵高で一番過激な男、矢崎景明だ。過激だからといつて彼は無能ではない、最新の装備と柔軟な戦力を持つてしつかり確実に相手を追い詰め、圧倒的な火力で相手を叩き潰す。それ故に味方の場合は恐ろしく頼もしいが敵の場合これほど厄介な存在はいない。だからこそ、タカは全力で相手を潰しに掛かる。いつもの武偵として犯人を逮捕するときの彼から特戦群の兵士として相手を殺すときの彼へとシフトチェンジする。

(相手の懐……射程内に入れば勝機はあるか。ならばっ！…)

タカが特戦群時代に鍛えた脚力で駆け出した。銃弾が顔を掠めて血が噴き出しがそんなことは気にしない。ただ目的地目掛けて駆け出すのみ。手にはMP7を二挺持つて彼の使う銃の射程内へと入り込んだ。タカがMP7のトリガーを引く闇夜に金色の薬莢が飛び散つていく。両手のMP7を交互に連射、間断ない射撃で相手の反撃の隙を与えない。

「景明！…」

「やつぱしお前が来るか、タカ！…」

「頼むから投降しろ！…」

「その手合いの台詞」この数週間で十回以上聞いたぜ！！」

タカがMP7で射撃すること数分、景明がRSSSSを手放して腰のホルスターにあつたH&K USP45を両手に持つて反撃に移る。流石は世界最強の特殊部隊、武器を捨てることに躊躇いがない。数分間場所を変え銃撃を続けながら一人は戦い続ける。

「つたく、タカ！ そのコート傷つけたら嫁さんに叱られるだろ！！」

「防弾性能がついてるコートはこれしかないんだよ！！」

黒と青のコートを羽織つた二人が互いに銃撃戦を繰り広げていく。遮蔽物に次々と弾痕が穿たれ火花を散らし穴を開けながら一人の戦いは続く。

「少なくとも俺達はお前が犯人なんかじゃないって分かってるから、戻れ、景明！！」

「まだ戻れるかよ！？」

「どうしてだ！？」

「これ相当危険な事件だぞ！ 少なくとも公安にSATのOBやお前さんとこの科学防護隊が動いてる！ どう考へてもまともじゃないぜ！ それに警視庁は最近裏金問題で揺れてるだろ！ それに関して警視総監が胃に穴開けて入院したって話もだ！ 少なくともお前らはこんなところで油を売ってる暇なんかないぞ！！」

その一言で銃撃が止んだ。

「どうこう」とだ？」

「話してる間に捕まえよつとは思つな……ま、あれだ。近い「つむぎ」必ず相手は何らかの行動を起こす……あーあつた。これだ、このUSBにそれに関するデータが詰まってる。それをクラスの連中で解析しろ、それから今後の行動を考えるんだな」

冷静にそう言葉を紡ぐ景明。

「景明はどうするんだ？」

「決まつてんだろ」

「どうするんだよ」

「ボコボコにする以外に選択肢があるなら教えて欲しいね」

その言葉に一人が笑った。

「さーて、ひつさしひりにタカとガチで戦えたし。ま、今日はここら辺で引き上げる】とにするか。じゃーな」

「あ、おい、景明ー！」

その言葉を最後に景明が「一トを翻す。その数秒後、気配が消えた。タカが景明の気配を追うが既に気配すら察知できなくなつていった。

「……さつすがだな。俺も最近はガチで戦うなんてことはなかつたから……な」

そう言つてタカも会談場所を後にしようとしましたとき。景明が残してR S A S S が目に留まつた。

「……弾は……まだあるな。うつし、使つか

タカがR S A S S を拾つて車の中に放り込んだ。そのまま武偵高に帰り、車輌科の車庫に車を停めた。隣には武藤が使つてゐる車やつかさの使つてゐる大型バイクが停められてゐる。車から降りてガレージを出るとその前には恍稀が待つてゐた。寝間着代わりのジャージを着てゐる。

「待つてた……のか」

「うん、やつぱり心配になつて

「結構長かつたと思うんだが……どうやつて時間を潰してたんだ?」

「アリアとつかさと一緒にガールズトーク。今日はつかさの悩み相談だつたかな」

タカの腕に自分の腕を絡ませる恍稀、タカは女子寮まで彼女を送ることにする。誰もいない、街灯だけが規則正しく並ぶ歩道を歩きながら、タカは恍稀の話を聞く。

「……やつぱりつかさ、踏み切れないんだつて

「なににだ?」

「景明くんに告白すること。1年の頃からずーっと想つてたんだけどその当時はまだ、嫌われてたから、景明くんも同じで自分のこと嫌つてるんじゃないかなーって思つてたんだって。でも……」

そこで一度恍稀が言葉を切る。

「でも……？」

「ほら、ハイジャック事件の次の日にクラスで喧嘩あつたじゃない。あのときに景明くんつかさの隣に立つて宣言したでしょ？」

「あー、してたな。確かにした」

思い出すよつにタカが言つ。

「その時、つかさは自分が想い人に嫌われていいつてわかつたんだけど。今度はもし告白したとしてフラれちゃつたらどうしようつて言つ悩み。任務中はそんなことを欠片も感じさせないし、気取らせないんだけど、やっぱつかさは気になつてるんだよ。自分の大切な人に会えないことが……ね。私も実際そうだつたし」

「……あれは確かに……な。あのときは散々みんなに迷惑かけたなあ」

懐かしむように言つタカ。ブラックイーグルに捕らえられたときの恍稀の取り乱し様は後からいろんな人に教えてもらつたことがある。そう言つときは大抵途中で恍稀が割り込んで話を開けずに終わつたのもいい思い出だ。おまけに学校が終わつた後は大抵恍稀

と一緒に学園の外へと出て行つたような気がする。理由を尋ねたときは『今まで私に心配かけたからーー.』だった。

「そりが、いまはつかさがそう言つ状況なのか……」

「そ、だから、私たちもつかさの力になりたいんだ。もちろん最終的な選択を下すのはつかさだけど、それまではできるだけ手伝つてあげたいなつて思つてるんだ」

恍稀がそう言つた直後、女子寮の前に辿り着いた。幾つかの部屋は明かりが消えているがまだ大半は灯りが灯つている。

「それじゃあ、また明日」

「タカ、ちがうよ。まだお休みのちゅーし・て・な・い・よ?」

「いーでするのか?」

「知らない?私たち武偵高の中でいちばん熱い夫婦だつてこと」

「つたく……」

「怒つた?」

「怒るわけないだろ、愛してる。恍稀」

「私も、愛してるよ勇治」

二人の唇が重なる。後日、この写真が新聞部によつて激写され武偵新聞のトップを飾り、タカがモテない強襲科2年生に学校中を

追い回されたのはまた別の話。

翌日、情報科ではタカと恍稀が景明から受け取ったHSBの解析を行っていた。そしてそこから出てきたのは複数の兵器設計データ、帳簿、音声記録、そして今回の企てに加わっている人物の詳細報告だった。

「これって、生物兵器だよね……？」

「科学防護隊の連中が俺達にも隠してたのはこれが……！」

そこに表示されていたのはBC兵器の設計データに輸送プランの経路、そしてそれが今どこにあるのかを示すデータだった。音声データは計画に関する人物達の通信、それらの膨大なデータが次々と二人の前に展開していく。

「……景明くんはこれをたつた一人で？」

「だらう……な。外は今どんな様子だ？」

「アドシアードが始まってる。私は一番最後のチアだけだし、もうちょっと……」

恍稀がそう言つた直後、二人の携帯が振動した。同時に鳴ると言うことは送られてきたのは武偵高の周知メール。そこに書かれていたことは……。

『現在豊洲にある警察病院がテロリストに占拠された。東京武偵高の全生徒は直ちにアドシアードを中止、緊急任務に従事している者

以外は直ちに現場へと急行せよ』

事態はここにきて大きく動き出そうとしていた。今まで隠れていた大蛇がようやくその姿を現すかのような雰囲気だ。パソコンを切つて一人も向かおうとしたとき恍稀があるフォルダの存在に気が付いた。恍稀が携帯へとデータを転送させてそのデータをつかさへと送る。それが完了すると恍稀もタカの後を追つた。

つかさが周知メールを受け取つて出撃しようとした直後、恍稀からメールが届いた文面はなし、あつたのは添付ファイルだけだつた。つかさがそのデータを開く。音声データだつたらしくスピーカーから声が聞こえてきた。その声はつかさの想い人にして最凶のパートナー、景明の声だつた。

『よー、つかさ。元気にしてるか？俺がいないからつて塞ぎ込んでなんかないよな？だつてお前は俺の相棒なんだから、そう簡単には凹まないつて信じてるぞ。

そろそろ事態が色々動いてると思う。だからつかさ、お前も現場へ向かえ。俺も今向かってる。もしかしたら合つかもしれないがそれより先にまずはこの事件を始末しよう。その後は……、まあ何とかなるだろ。

部屋にある銃は好きに持つていい。派手なのも危険なのもビシバシ持つていてくれたつてOKだ。何たつてお前は俺の相棒だ。過激な武装で来ることを期待してる。そろそろ俺も現場に着く頃だ。それじゃ、現場で会おう。待つてるぞ』

そこで音声は途切れた。瞳から今にも出てきそうな涙を堪えながら彼女は彼の部屋の鍵を開けた。銃は好きに使っていいと言つた。だからもう凄まじく過激な武器を持つていく。アンチマテリアルラ

イフル、LMG、グレネードランチャー、ショットガン、SMGにハンドガン、後は手榴弾に様々な爆薬類やナイフ類をベストに装備して彼女は部屋を出た。

「待つて景明。今私が行くから

瞳に強い意志を宿し、つかさは一步を踏み出した。

第16話 風雲急（後書き）

そろそろ佳境へ突入します。では、感想お待ちしております！！

第17話 バンカー・バスター（前書き）

今年最後の投稿ですね！

第17話 バンカーバスター

男は警察官になつたとき、これで弱い者を守ることが出来ると思つた。イア間まで守ることの出来なかつた人々を、この手で、自分が守れると思っていた。だが現実は彼の想像とは大きく違つた。常に起つる犯罪、それによつて本来守るべき彼らが、弱い人々を切り捨てるという現実を、警察内部に存在する様々な確執や利権、様々な要因が彼を変えていつた。そして、あまりに理想とかけ離れた現実を目の当たりにしたとき、彼の友人は自殺した。そして警察の起こしたある事件により彼の大切な人が帰らぬ人となつた。

彼は絶望した。しばらくは警察内で同志を集め、武器を揃え、来るべき日に向けて様々なことを行つた。そして今、彼はようやくここまで來た。豊洲警察病院、ここに彼から大切な人を奪つた男がいる。そして今こそ腐りに腐りきつた警察の内部を伝えるため、彼らは立ち上がつた。彼が今いるのは病院の中央官制室。近くの椅子には警察長官が縛り付けられている。

「さあ、長官、裏金のことを洗いざらついていただきますよ」

手に持つたN4を突きつけながらそう伝える。現在病院を制圧しているのは彼を含む30人、殆どがS A TのO Bだが一般の警察官もいるため実際にはもう少し多い。装備している銃はベレッタR×4とFN F2000、ハンドガンはSIGザウエルP226を持っている。全員が黒いアサルトスーツを着用し、タクティカルベストを着ている。外では警察の他に東京武徳高の生徒達も揃つてゐる。

「さあ、準備は整つた。各員、持ち場に着け」

「はつー」

トランシーバーから流れる数十人の声、それと共に今回のテロを企画し実行に移した張本人、安西浩介は銀色のケースを取り出した。

豊洲警察病院前 9:12

つかさが病院前に着いたとき、既にマスコミが数十人単位で集まっているところだった。今回のつかさの服装は、武偵高の防弾制服の上にタクティカルベスト・・・それも武偵高で使われているものとは違う景明から貰った本格的なもので、アメリカ軍デルタフォースやS E A L sで使われているものと同系列のものだという。そしてその上には防弾繊維を織り込んだ新しいロングコート。黒地に白でトライバル系のデザインで翼が描かれている。

「現場にいる武偵高の生徒さんに話を聞いてみることにします。すいません、東京武偵高の生徒さんですか？」

最近テレビで話題沸騰中の人気アナウンサーがつかさに話しかけてきた。面倒だったのだが応えないと後で何を言われるか分からない、嫌々ながらに応えることにした。

「はあ、なんでしょうか」

「これから突入作戦に参加されるんですか？中の人質の安否の確認も取れていないとのことですが？」

「まだ突入って決まってないですよ。少しは頭働かせてくださいよ」

「でも、その装備は明らかに突入用と言つよつ……戦争用ですよね？」

「そうですけど何か？」

アナウンサーが若干ひるんだが報道関係者のプライドが勝つたらしい。更につかさに詰め寄つた。どうやら平和な日本で彼女のような異質な存在が許せないようだ。

「貴女は先日報道されている警視庁長官暗殺未遂事件の容疑者でもある矢崎景明とパートナーだつたようですが、その辺について何かコメントをいただけませんか！？」

まるで自分の相棒を犯罪者扱いするようなその物言いにつかさが切れかけた。だが、目の前のアナウンサーを殴り飛ばすなりアンチマテリアルライフルでぶち抜くとちょっと放送できなくなつてしまふので嫌味つたらしく伝えることにした。

「そうですね、貴女みたいな安心な場所から偏つた意見を述べる、顔だけで売れてる様なレポーターの風上にも置けないようなクズやそこにあるディレクターみたいにエライ人の顔色をうかがうことが人生最大の仕事だと思つてるようなバカより、私の相棒は素敵で格好いいです。では」

後ろから言葉の意味に気が付いたレポーターがつかさに掴みかかってきた。ツインテールの片方を引っ張ろうとしたとき強引に足払いをかけられて地面に転倒する。そこにホルスターから抜いた景明のゴールドコンバット？を突きつけるつかさ。

「これで少しはそのウジ虫が湧いてそうな脳味噌もまともになつた

と思いますので

銃を突きつけられたレポーターは失禁しつつ意識を手放した。

仮説指揮所 10:21

仮説指揮所内部には既にSATの他、SITが展開していた。

「ふん、全く何で私のような人間が、このような最前線に赴かなくてはならないのですか。しかも東京武偵高と合同でなどと、私に子守をしろとも言いたいのですか？」

「……作戦指揮官を前にその口を叩けるたあい度胸じゃねえか。今すぐその綺麗な頭に第三の目を開けられたらとつとと
帰りやがれ」

蘭豹とSITの作戦指揮官が喧嘩腰で遣り取りしていると、銃弾が風を切る音が響いてSIT指揮官の身体を貫いた。本部にいたメンバーの殆どが手近な遮蔽物に隠れる。つかさや他の強襲科のメンバーもトラックの陰に隠れた。

「誰か屋上のスナイパーを排除しろ！！」

遮蔽物越しに蘭豹の声が飛ぶ。それと同時につかさが手近にあつたM14を手にとつて狙撃手の位置を探す。数秒後彼女のそばを銃弾が掠めた。

(見つけた)

相手が場所を移動させるより早く、つかさのM14がスナイパーの足を的確に撃ち抜いた。

「スナイパー排除！」

つかさの報告と共に隠れていた他のメンバーが顔を上げる。これでこの現場の指揮権は全て東京武偵高に移った。普段はアレな性格の蘭豹だがこういう時の指揮は恐ろしく的確だ。つかさの隣をG36Cを持った強襲科の一年生が通り過ぎていく。一年生も先日の景明捕獲作戦で大多数が行動不能にさせられたが動ける者やその日は別の任務でいなかつた者をかき集めて対応している。

「服部！ こっちに来い！！」

蘭豹がこちらを呼んだ。指揮本部の中にはいると見知った顔がいる。あかり、ライカ、小夜子、茜、希、の五人。

「お前にこの四人を預けるから、病院の正面から突入しろ。できそうか？」

「出来ます」

簡潔にそう答えると蘭豹はそうか、とだけ言つて別の指揮に移つた。5人を連れて武器を満載したトラックのところへと向かう。トラックの中にはSMGやハンドガンを中心に大量の銃器が並んでいた。だが、それを見るとつかさは踵を返して自分の乗つてきた車の後部ドアを開ける。そこにはバレットM82A1が2つ、コルトM79“ブルーバー”が4つ、使い捨て対戦車ミサイルLAWが4本、P90TRが2つ、テクノアームズPTY MAG7が2つ積まれていた。M79を腰の後ろに差してMAG7をレッグホルスターに

納める、P90TRはスリングで肩から掛ける。LAWを4本担いで最後にバレットを両手に持つ。

「とりあえず、みんなも準備してきたら?」

「……先輩、それ全部使うんですか?」

「使う予定だけど?」

あかりの質問に何でもないかのように返すつかさ。あかり達が突入用の準備を整えて、仮設指揮所に戻ってきた。全員が突入用のC装備に着替えている。

「準備は整つたな……ん?」

蘭豹が病院の入り口を見ながら疑問の声を上げた。病院の扉が開いて、その中から数十人の元S.A.T隊員が出てくる。手にはFN F2000やベレッタR×4を持っている。

「我々は警察の不正をただすために立ち上がった!金を貰つて依頼を片付ける武僧はさつとばされる。」

拡声器を持って口上を言っていた男は最後まで言葉を発することが出来なかつた。男の身体の中央部に何かが当たつて後ろに吹き飛ばされる。

「……少し、五月蠅いかな

撃つたのはつかさだつた。バレットの砲口から硝煙が棚引いてい

る。

「ちつ！」

占拠隊が一斉に銃を構える。

「服部、始めるぞ」

「はい」

その直後、交渉用に警察が持つてきていった大型スピーカーから交渉担当の男の声が消えた。そして、それを合図に病院の前にある駐車場に六人の少女が立つた。

「みんな、危ないって判断したらすぐに脱出して」

「「「「「はい」」」」

「うん、いい子だね。それじゃ……始めるよ」

それと同時にスピーカーから音楽が流れ始めた。この場所に恐ろしく場違いなロック調のナンバー。あまりの爆音に丁々局のレポーターの声すらかき消される。

『それではバンカーバスター1。オペレーションスタート』

通信科の中空知の澄んだ声がつかさのインカムに響き渡った瞬間、6人が駆け出した。前にいる5人が的確な射撃を繰り返して隊員を打ち倒していく。あかりはMP7の二挺撃ち。希はデトニクスと二ユーナンブ・・・オートマチックとリボルバーの変則的な二丁拳銃で敵を撃ち倒していく。前に立った数十人が倒れると病院の入り口

から重装甲の兵士が8人出てきた。

『ジャガーノート確認。護衛の5人は待避してください』

中空知の声が響くとあかり達が後ろに下がった。そして大量の武装をその身体にひっさげながら赤いフレームの眼鏡をかけた栗色の髪の少女は走る。

「まずは一人！！」

右手のバレットが銃弾を撃ち出した。銃弾が一人目のジャガーノートに直撃する。その直後残りの数人が持っていたMG4軽機関銃を撃ち始めた。だが、その火線をつかさは難なく避けていく。ジャガーノートは重装甲なためそう簡単に弾丸を通さない。その反面、移動能力は制限される。そしてかのじょはジャガーノートの欠点である機動力をついて彼らに襲いかかつた。バレットの砲口がオレンジ色に輝く度また一人、また一人とジャガーノートが倒れていく。

数分後ジャガーノートの一群は全てが倒れていた。そして、つかさがバレットを撃つ。まるで二丁拳銃でも撃つているかのようにアンチマテリアルライフルを腰だめに撃つ。自動ドアが完全に砕け散つたところでバレットを投げ捨てて受付にLAWを立て続けに叩き込む。紙や電話の欠片が舞つて炎と共に数人の占拠隊が出てくる。それを冷静に蹴り転がしながら歩みを進めると今度は別の場所から誰かが出てきそうな気配がしたのでM79を叩き込む。銃の中央が折れて新しい弾丸を込めながら病院の中を闊歩していくつかさ。

手近なところや敵の気配がしたところには容赦なくグレネードランチャーを叩き込んでいく。グレネードが尽きると今度はMAG7を手に持つて後ろからナイフや警棒で襲いかかる男達を一人ずつ黙

らせていく。

『どのくらい倒しましたか?』

「今ので40かそこらくらいかな。まだまだいとと思うから掃除は続けるよ」

中空知の通信にそう返しているときでも彼女は攻撃の手を緩めない。MAG7を捨ててP90TRを両手に持つ。慌てて迎撃に出できた敵をフルオートで次々と撃ち倒していく。つかさ。その手に持った銃からは容赦無く弾丸が舞う。ここを占拠したグループはつい先刻流された犯行声明で我々はこの国の正義となると言ははなつた。

つかさ自身そんなことには微塵も興味はないしじぢらかというとどうでもいいとさえ思つてゐるが『正義』という言葉を軽々しく使つたことに関してだけは流石に頷くことが出来なかつた。

昔のことと思い出す。自分が中学生だつた頃、クラスに一人だけ正義を語る生徒がいた。順番に割り込む人と問いただし、不正を行つてゐる生徒を白日の下にさらけ出した。だがそんな彼が辿つたのは学校中からの暴力の嵐と罵詈雑言の数々だつた。

その時から既に達觀しつつあつたつかさはその光景を黙つて眺めていた。同時期にクラスで陰湿なイジメが始まつた。ある朝のこと、つかさはいつものようにイジメの光景を眺めながら校舎の外に広がつてゐる空を眺めていた。すると教室に彼が入つてきた。

ここで彼が真つ先に彼女たちのイジメを止めたのなら自分は何も言わず何もしなかつただろう。だが、その時彼はあろうことかつかさに声を掛け彼女を責め立てた。

『見て見ぬ振りをするなんて、それでも君はこのクラスの仲間か！？』

『あの子は私に直接関係ない、だから助けもしない』

『それは、君も彼女たちと同じようにあの子をいじめているんだ。さあ立つて、僕と一緒に正義を成しに行こう！』

爽やかに笑つてつかさを誘つたその少年の顔はまるで・・・そう、この世の中が全て善人で回つていると信じて疑わない表情だった。

だから、つかさは彼に近くにあつた机『を』叩きつけた。机が落下する音を聞きながらつかさは更に少年を殴り飛ばした。幸い飛んでいった先にいじめの連中がいたので諸共殴り飛ばした。

（……その時、私は知ったのかな。この世界に『万人が納得する正義』なんて有りはしないって）

回想モードでもつかさの狙いは正確だ。P90TRのリロードをしつつ彼女は思う。この世界に眞の正義なんて無い。あるのは立場の都合と思惑だけだと。

（結構青臭いこと考へてるなあ……）

こんな考えになつたのも最近のことだ。景明と行動し始めてからだろう。ダークな印象の彼だがあれはあれでしっかり考へて行動しているらしい。

「まつてて、もうすぐ、そつちに着きそつだから」

静かに、誰にも聞こえないように覚悟を決めたかのような言葉と共に、つかさは人質が居るとされるホールの扉を開けた。

この日、豊洲警察病院の前に展開していたS A TのO Bとジャガーノート8人を瞬く間に倒したつかさの名は東京中に広まることとなる。たった一人で厳重を越えた堅牢な要塞の壁を突き崩し、守備隊を全滅させながら、人質を一人も怪我せることなく生還させたつかさは新たに二つ名を獲得する。曰く『東京武僧高の人間破城鎧』と。

戦いはまだ終わらない。

第17話 バンカーバスター（後書き）

これが筆者の今年最後の投稿になります。来年からはオリジナル小説の方の更新がメインになります。

二次創作の更新はISをメインに更新していく予定ですので、アリアを楽しみにしている方は気を長くしてお待ち下さい。ISBe
for e Storyの更新は遅くとも来年一月中に投稿できたらいいなと思っています。

では、皆様、来年もまたよろしくお願ひいたします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1644v/>

緋弾のアリア バレットダンサーズ

2011年12月31日16時53分発行